

[1 表紙]

.小栗一代記くをぐりいちたいき

[2 右]

繪本 鈍亭主人著

小栗一代記全

一盛齋芳直画

[2左]

忠勇小栗一代記 全

惣目録

第一回 .小栗助重くをくりすけしげ>.横笛くよこぶえ>の.妙手くめうしゆ>を.得くゑ>んと.欲くほつし>て.
禍くわざはひ>を.口くかわす>

第二回 .照手姫くてるてひめ>.金亀山くきんきさん>に.詣くもふで>てはからず.助重くすけしげ>ときぐう
す

第三回 .助重くすけしげ>.俄鬼病くがきやみ>となり.熊野本宮くくまのほんぐう>に.温泉くおんせん>浴す

第四回 .照手くてるて>.悪漢くわるもの>に.謀くはかられ>て.萬屋くよろづや>が.許くもと>に.苦行くくぎ
やう>す

第五回 .善惡應報くぜんあくおうほう>.忠孝貞操くちうかうていさう>.本懐くほんくはひ>をたつ

[3 右]

.狂言綺語くきやうげんきぎよ>をもて.勸善くくわんぜん>を.導くみちび>き.談笑諷諫くだんしやうふうか
ん>して.懲悪くちやうあく>を

.諭くさと>すと.宜くむべ>なる.哉くかな>.經典儒教くけいでんじゆきやう>の.大声くたいせい>は.里俗く
ぞく>の.耳くみ>に.入くい>らず

.小児くせうに>の.病くやまひ>を.愈くいや>するに.良藥くりやうやく>は.口くくち>に.苦くにが>く.熊膽人
参くゆうたんになじん>の

.高價くかうか>なるも.彼聖教くせいけんきやう>の.解難くげしかたき>が.如くごとくこ>をもて.口當くくち
あた>り

よき.飴くあめ>を.舐くねぶ>らせ.良藥くりやうやく>にかゆるといへり.熟論くつら／＼あげつら>ふに.聖
賢くせいけん>

の.貴くたつと>き.教くおしへ>は.良藥くりやうやく>にしてはかなき.稗史譚くさうしものがたり>は.太白入
くたいはいり>の.藥くくすり>

.飴くあめ>なり.贅語くぜいご>の.中くうち>に.勸懲くくわんちやう>の.意くい>を表し.自然くおのづから>.
五常くごじやう>の

.道くみち>に.叶くかな>へるをもて.小説者流くせうせつしやりう>の.心要くしんやう>とす.作者くさくしや>
の.用心くようじん>

こなるべし。然くしかり。と。雖くいへとも。余くよが。如くごときは。未其意くいまだそのい。を。貫通くわんつうせずし

[3 左]

て。強くあながち。に。戯墨くけぼくの。僻くへきあり。我くわれ。には。免くゆるせと。詠くゑいぜし。人くひと。には。似くにくるべくも。
・有くあらねど。此病くこのやまひある。類くたぐひならん然。今くいまや。爰くこに。刻成くこくなるの。小冊くせうさつは。友くとも
・垣くがき。何某くなにかし。の。遺稿くいかうなるが。首尾くしゆひ。全くまつたふせず。稿中くかうなかばにして。篋中くきやうちうあること
・既くすでに。久くひさし。時至くときいたりて。書肆くふみやの。主くあるじ。茅屋くほうをく。に。携くたづさへ。来くきたり。按くかうを。希くこふ事。屢くしは／＼也
・彼人くかのひと。作意くさくいよしと。雖くいへとも。看官くみるひとの。讀くよむに。飽くあかず。是くこれに。文くぶんをまし。回くくわい。を。重くかさねて
・慈童婦幼くじどうふせうに。見安くみやすからしめんと。蒼卒くさうそつに。補綴くほてつして。是くこれ
あたふ。所謂くいわゆる。蛇くへび。を。画くゑがいて。足くあし。を。添くそゆるの。業くすさみにやあらんかし

嘉永七甲寅孟春 戀岱市隱 鈍亭蟬史記

[4右]

・小栗満重くをぐりみつしげの。嫡子くちやくし
・同苗くどうめう十郎。助重くすけしげ
・後くのちに。判官代くはんぐはんだい
・平兼氏くたいらかねうじ

・横山大膳安秀くよこやまだいぜんやすひで
・三男三郎安武くさんなんさぶらうやすたけ

[4 左]

天の。照々くしやう／＼たる。善くぜんに。福くさいはひし
・淫くいんに。禍くわさはひすといへる古語を
今宵しも雲みな
月にかくれけり
魯文賛

横山の養女
照手姫

[5右]

.小栗助重くをぐりすけしげ>.英雄十驛くえいいうしふき>

片岡加太郎春教

田辺平六郎

長秀

同

加次郎

春高

[5 左]

田辺平八郎

長為

池ノ庄司

助長

[6 右]

風間二郎

正貞

美登小太郎

為久

[6 左]

後藤兵助助高

後藤

大八郎

高次

風間

八郎

正固

[7 右]

.小栗一代記全傳くをぐりいちだいきせんてん>

江戸戀岱 鈍亭主人補綴

第一回

.人皇くになかう>.百くひやく>二代.穰光院くしやうくわうゐん>の.御宇くぎよう>.足利宝篋院殿くあしかゞ
ほうきやういんでん>.義持公くよしもちこう>.京都将軍くきやうとしやうぐん>の.頃くころ>.應永くおうえい>
二十

八年.常陸國くひたちのくにの.住人くぢうにん.小栗孫くをぐりまご五郎.満重くみつしげの.嫡子くちやくし十郎.助重くすけしげといへる.者くものあり.兵練弓馬くひやうれんきうばの.誉くほまれ.近郷くきんがうにきこへ.文武両道くぶんぶりやうどうに.頗くすこぶる.秀才くしうさいありて.末くすへたのもしき.若雄くわかものなるが.一歳宿願くひとせしゆくぐはんのことありて.隣國下總くりんごくしもふさの.國くくに.相馬郡布施村くさうまこほりふせむらなる.弁才天くべんざいてんへ.参詣くさんけいなしその.夜くよは.社前くしやぜんに.通夜くつやなしけるがさし.登くのほる.秋くあき.の.月くつき.祠くほこらを.照くてらし.名くなにしをふ.利根くとねの.川面くかわつらにきらめきわたり.心耳くしんに.も.澄くすみて.塵外仙境くちんぐわいせんきやうのおもひをなしいとしん／＼とせし.程くほどに.兼くかねて.好くこのめる.横笛くよこぶへとり.出くいだし.秘曲くひきくを.尽くつくしふきすさめば是が.為くため.に.千種くちくさ.にすだく.虫くむしの.音くねを.止くとゞめ.河水くかみづの.底くそこ.にひびきつきも.麗くうるわしく.聞きこへしかば.己くおのれもいとゞ.興くきやうを.催くもよほしたる折こそあれ.川水くかはみづ.俄くにはかに.逆浪くさかたちて.朦朧くもうろうとして.其中くそのなかよりやん事なき.女くじよ.ろうの.頭くあらはれ.出くいで.忙然くぼうぜんとして.小栗くをぐりか.笛くふへの音にきくとれ

[7 左]

さも.餘くよ.念なき有様に小栗は深く.怪くあやしみつゝたちまち笛の音を.止くとゞめかの.女くぢよ.ろうに打むかひ
そも御身は何人にておわしますや.深更くしんかうといひ人なき社前に来り給ひて如此なるは.如何くいか
にぞと.眉くまゆをしそめて.問程くとふほどにかの姫は.微笑くほゝゑみつゝ助重さのみ.驚くおどろき給ひぞ我身は.當くとう所の本
.躰くたいなり.汝くなんぢが好める笛の.数曲くすきよく衆に口て.自然くをのづから.妙あり汝武門の家に産れその道に.疎くうとから
ずさりなから此人にして此.病くやまひあり.汝くなんじ横笛を深く好みて.蘭室くらんしつに入その香妙を.得くゑんと
.欲くほつすれども.好くこう事必ずなきにしかず好める道に心をゆだねその.禍くわざはひを引いだす事.和.漢くかん
に.例くためしすくなからず.火急くくわきうに奥儀を.極くきわめずとも.功餘力くこうよりよくある時を見あわせ.佳境くかきやうにいらんと
思ひなばわらはが.其師くそのしを.導くみちびくべしこは吉野なる山奥におわします阿.能くのをの仙聖こそならひ
なき.笛曲くてききよくの.達くたつ人なれば名とげて後にかしこにいたり.巨細くこさいに.口傳くくでんをうけべきなりさりとて
前にもいふごとく急て妙手をえんと.欲くほつせは却てその身の.禍くわざはひあり夢／＼あやまつ事なかれ

とて水底に入よと見へしかたちまち、数丈くすちやうの龍となりて沈て見えなりにける助重
奇意の思ひをなし始めて夢の覚たるごとくこれこそ、當社くとうしやの神、躰くたいにて、弁才天くへんさ
いてん女の、加護くかご

[8挿絵]

[9 右]

ならんと、信心くしん／＼いとゞ、膽くきもにめじい社、檀くだんにおかひ、再くさい拝して、宿所くしゆく
しよへ下、向くこうなしたる後程、笛曲くてききよくに
心を、碎くくだきたゞひたすらに奥儀の妙を極んものとしきりに心いそがれて龍女のふかき
、禁くいましめを、忙くまされたるにはあらぬども、好くこのめる道に心、迷くまよいてはやく吉野に、分入
くわけいらばやと、朝暮くてうばそれ
のみ心におもひて意馬の、締足くていそくとゞめかねつ、只一人旅路の仕たく身、軽かるに、調くとの
へはる／＼と
、南都くなんどにおもむき吉野の奥にわけ入てかゝる、仙人くひじりのおわさずやと山家にたちより
木、樵くこりに附て、尋求くたづねもとむれども知る者なければ山深くいたりつ、嶺くみねをすぐる山伏
に出あひ
しか／＼と、問くといひかくるにかの山伏されば誠にさることの候此山絶、頂くてうにおり／＼笛の音聞
ゆる
事あり、傳くつたへきく南、朝くてう後、醍醐くたいご天、皇くわうの、寵臣万里くちやくしんまで小路
藤、房郷くふさきやう、隠遁くいんとんありて、仙境くせんきやうに入
此峯に住給ふよしうけたまわると、答くこたへければ小栗はさこそと、雀踊くこをとりして山、伏くふしに
礼を
いべたち別れつ、足をはかりに山また山をつたひては道のなき、嶮岨くけんそをよぎり、巖岩くがんぜき
か
つらを踏したき清流たる谷間をくだりかろうじていたゞきにうち、登くのぼり向ひをき
つと見わたせば、紫雲くしうん、棚くたなびきふくいと、蘭奢くらんじやの香りあたりをはらひ、樹下くじ
ゆか石上に草を

[9 左]

つかぬその、上くうへに、座くさを、結くむすひ、瓢然くひやうぜんたる、雀髪くくわんはつ、の、異人くいじ
ん、手くてに、笛くふへをもち、眼くまなこを、閉くとぢて、居くゐたりしかば
、小栗くをぐりは、近くちかくひざまづき、某くそれがしことは、常陸くひたち、の、國くくにの、住人くぢうに
ん、小栗くをぐり、十郎、助重くすけしげといへる、若冠者くじやくくわんものにて候
が、文武くもんぶをたのしむその、間くあわひに、深くふかくも、横笛くわうてきの、曲くきよくに、心くこ
ろを、尽くつくし候へども、末くいまたその、妙くめうに、至くいたらず、何くなに
、卒くとぞ、能師くしきしを、得くえんものと、年くとしごろ、下総くしもふさの、布施村くふせむらなる、弁
才天くへんざいてんへ、祈願くきぐわんをこめしにはからすも

.龍女くりうちよの.告くつげを.蒙くかふむりつはる／＼と.仙聖くひじりのおこしますを.聞ききし
たひ.是迄くこれまで.登山くどざん仕り.一偏くひとへに.余くをのれか
.赤心くまこころを.あわれみ.秘曲くひきよくを.傳くつたへ給わるべしと.拝くはいし.敬くうやまひのぞ
みければ.異人くいしんは.静くしつかに.眼くまなこを.見くみひ
らき.始くはしめて.小栗くをぐりはうち.見くみやりよきかな.助重くすけしげ.我くわれこゝにありて.汝
くなんしを.待くまつこと.既くすでに.久くひさし
いかでか.秘曲くひきよくを.惜くをしむべきこと／＼く.免くゆるすべしと.間律韻声くりよりついんせ
い.至仙くしせん.の.調俚くでうり.残くのこるかたなく
.傳授くでんじゆしてかきけすごとくうせにけり ○ こゝに.一色式部少輔くいつしきしきふせうやう.詮秀
くあきひでなる.者くもの.兼くかねて.不和くふわ
なる.満重くみつしげが.長子くちやうし十郎.助重くすけしげ.横笛くよこぶへの.師くしを.求くもと
めんとて.忍くしのびて.吉野くよしのへいたりしときにくつ
きやうの.事くことなりこたちまち.一くひとツの.謀計くほうけいを.企くくわだて.交くまじり.厚くあつ
き.山名内蔵人氏治くやまなくらんどじはるを.かたらひ
つ.鎌倉くかまくらの.管領くくわんれゐ.左馬頭持氏朝臣くさまのかみもちうじあそんへ.纔言くさんげ
んしけるは.小栗一家くをぐりいつけの.者くもの.君くきみをうらみ.奉くたてまつる

[10 右]

ことのありとて

.謀叛くむほんを.企くくわだて候よし
.此度子息くこのたびしそくなる.助重くすけしけを
.吉野くよしのへつかわし.南朝くなんてうのけん
ぞくをかたらひ.下野くしもつけの.新田くにつたの
.余類くよるいと.調くてうしあわせ.鎌倉くかまくらを.傾くかたむけん
との.風聞くふうぶんもつぱらにてまぎれなく候とて
.讒言くざんげん.の.舌頭くぜつとうまことしやかに.言上くごんじやうす.折くおり
ふし.執権上相憲実くしゆつけんうへすぎのりざね.持氏公くもちうしこうの御.名代くめうだい
として.上洛くじやうらくの.留守くるすなればさらに.諫くいさめる.者くものも
なく.元くもとより.案愚くあんぐの.大將くたいしやうなれば.一色くいつしき.讒言くざんげんを
まこと.思くおもひ.早速くさつそくに.小栗くをぐりもめしてこれを

[10 左]

.窮問くきうもんあるにぞ.小栗くをぐりは大ひにうち.驚くをどろき.身くみにおぼへなき.誓くせい
.紙くしを.出くいだしいち／＼これを.陳くちんじけれ
ども.持氏くもちうじ公御ふしん.晴くはれやらず
.一族くいちぞく.残くのこらす.常陸くひたちなる.居城くきよじやうへ
.蟄居くちつきよおほせつけられしかば
.小栗一門くをぐりいちもんははからざる.讒者くざんしやの.偽言くぎげんに

.君<きみ>の御ふしんを.蒙<かふむ>り.一族居城<いちぞくきよじやう>に.蟄居<ちつきよ>
して.罪<つみ>なくて.見<み>るはい.所<しよ>の.月<つき>.此上<このうへ>は.賢明<けんめい>の
.上扨<うへすぎ>か.帰路<きろ>を.待<まち>うけかの人につき.曇<くも>りなき.心<こころ>を
申.開<ひら>かんものをとて.安閑<あんかん>としてうちすぎけり.扱<さて>も.鎌倉<かまくら>
の.持氏<もちうじ>公には.薪<たきぎ>に.炎<ほのを>をそゆるが.如<ごと>き.一色等<いつしきら>か.
追々<をい／＼>の
.讒言<さんけん>を.弥<いよ／＼>.信<しん>じ候いかります／＼.強<つよ>く.今<いま>は.一色山名<いつしきやまな>に.仰<をほせ>て

[11 右]

.近國<きんこく>の.兵<へい>を.催<もよ>ふされ.既<すで>に.小栗<をぐり>を.征罰<せいばつ>せんと
て.御馬<おんむま>を.向<むけ>いるべきに.極<きはま>りしが.附随<つきしたか>ふ
めん／＼には.一色式部少輔<いつしきしきぶせうゆう>.詮秀<あきひで>.山名内蔵人氏治<やまなくらん
どうじはる>.桃井中務少輔直弘<もゝのみなかつかさせうやうたゞひろ>.一色左京亮忠兼<いつしきさき
やうのすけたゞかね>
.大井<をほゐ>三郎.氏光<うじみつ>.吉見伊与守晴久<よしみいよのかみはるひさ>.結城<ゆうき>左エ
門.尉<じやう>.氏朝<うじとも>同八郎.久朝<ひさとも>同九郎.時朝<ときとも>.梶原<かぢはら>
.美濃守景定<みのゝかみかげさだ>をはじめとして.木戸<きど>.田村<たむら>.白川<しらかは>.海老名
<ゑびな>.那須<なす>.岩城<いわき>.三浦<みうら>の.人々<ひと／＼>を.先手<さきて>とし
.其<その>ほか.近國<きんこく>の.大小名<たいせうやう>われも／＼とはせくわはりその.勢<せい>.都
合<つがう>五万.余騎<よき>.日<ひ>あらず.常陸<ひたち>に
.當着<とうちやく>して小栗.村<むら>の.居城<きよじやう>をば.十重<とへ>.廿重<たへ>にそふりまきけ
るそも／＼.一色詮秀<いつしきあきひで>が.小栗<をぐり>
の.一族<いちそく>をうしなわんと.企<くわだて>はいかなる.故<ゆへ>ぞとたづめるに.京都<きやうと>
の.將軍<しやうぐん>.義量<よしかず>公.逝去<せいきよ>あり
て.足利<あしかぎ>の.家嫡<かちやく>たへたれば.持氏朝臣<もちうじあそん>は.尊氏<たかうじ>公の.
御舎弟基氏<ごしやていもとうじ>公の.餘代<よだい>なれば御.家督<かどく>
と.思<おも>ひの.外<ほか>.細川<ほそかは>がはからひにて.佛門<ふつもん>に.入<いり>給ひし.義圓
<ぎゑん>といへる.義満<よしみつ>公の.御子<おんこ>を.還俗<けんぞく>
させ.義教<よしのり>と.改名<かいめい>し.奉<たてまつ>りやがて.將軍<しやうぐん>.旨下<せんげ>あ
りければ.一色詮秀<いつしきあきひで>.案<あん>に.相違<さうゐ>しより／＼
.持氏<もちうじ>公へ.御謀叛<ごむほん>を.勸<すすめ>ける.程<ほど>に.小栗満重<をぐりみつしげ>.深
<ふか>く.諫<いさ>めとゞめければ.一色<いつしき>は.面目<めんぼく>を.失<うしな>ふのみなら
ず.己<をのれ>.京都<きやうと>の.管領<くわんれい>にならんとのたくみなりしが.心<こころ>の.俣
<ま>にならざるは.偏<ひとへ>に.小栗故也<をぐりゆへなり>と

[11 左]

これをうらみ、憤(いきどほ)り、先(まづ)、小栗(こくり)を(ぐり)をうしないで、後(のち)、再(また)ふたゝひ、思(おも)ひをとげんものをとかく、讒言(ざんげん)をかまへし
なりさる、程(ほど)に、鎌倉勢(かまくらぜい)はをめきさげんで、攻(せめ)よするに、城中(じやうちう)はしそまりかへつて、音(おと)もなし、謀計(はかりごと)
にやとしばらく、馬(うま)をひかへし、所(ところ)に、櫓(やぐら)の、楯(たて)をおしひらき、小栗父子(こくりふし)は、兜(かぶと)をぬき、膝(ひざ)まづき、寄(よ)せ
、手(て)にむかつて申(まを)けるは、先(まづ)もつて、遠路(ゑんろ)の、御發向(ごはつかう)おそれ、入(いり)候(こう)なり、併(しか)しながら、管領家(くわんれいけ)には、餘(あま)り
ににげなき、御所業(ごしよぎやう)に候(な)れ、某父子(それがしふし)、御誅戮(ごちうりく)あるべくは、御使(ごし)をんつかひ、壱人(ひとり)たまわるに
おみては、一族(いちぞく)、残(のこ)らず、自害(じがひ)つかまつり、宿意(しゆくい)なき、心底(しんてい)に、一命(いちめい)を、差上(さしあ)げ、君(きみ)の御ふしを
、晴(は)らし、たてまつるべきに、恐(おそ)れながら、満重父子(みつしげふし)においては、君(きみ)に、對(たい)つたみし、奉(たてまつ)り、弓弦所存(ゆみひくしよぞん)、毛頭(もうとう)こ
れなく、某等(それがしら)か、申條(もふすでう)、一應(いちをう)とくと御、聞入(きいれ)あらば、讒者(ざんしゃ)の、舌(した)の、根(ね)を、引(ひ)きぬき、其(その)のち、心(こころ)して
、自害仕(しがいつかまつ)りたく候と、演舌(ゑんぜつ)す、桃井直弘(ももゐのゐたぢひろ)、小栗父子(こくりふし)が、罪(つみ)なくて、亡(ほろび)んことを、愁(うれ)ひ、思(おも)ひて、濟(す)みし
、猶餘(ゆうよ)して、見(み)えければ、一色(いつしき)はいら、立(たち)つ、詮(せん)なきことば、戦(た)かひ、無用(むよう)なりあれ、射(い)てとせと、下知(げち)しけ
れば、小栗父子(こくりふし)は、完尔(くわんし)とうち、笑(ゑみ)、其義(そのぎ)ならば、是悲(ぜひ)もなし、恐(おそ)れながら、一矢(ひとや)、参(まゐ)らせんと十郎、助重(すけしげ)
、弓引(ゆみひ)きよせ、白羽(しらは)の、束矢(そや)を、打(うち)つがひ五人、張(はり)に、十四束(しうしそく)を、切(き)つてはなせば、其矢(そのや)ひとつ、一色(いつしき)が、兜(かぶと)の

[12 右]

、鐵冴射(くわがたい)きつたりこれを、軍(いくさ)の、始(はじめ)として、数(かず)の、寄手(よせて)も、小栗父子(こくりふし)の、弓勢(ゆんぜい)するとき、早業(はやわざ)に
あぐんでさらに、近(ちか)ならざれば、満重(みつしげ)を、打(うち)ふりて、者(もの)ともすゝめと、下知(げち)はげしく、城門(じやうもん)は
、打(うち)ひらき、満重(みつしげ)が、伯父小栗助(おじこくりすけ)兵衛、正豊行年積(まさときやうねんつもり)て六十七、才(さゐ)は、舍弟(しやてい)、治郎(しろ)右衛門、重秀(しげひて)
六十三才二人の、老武者兜(おいむしやかぶと)の、間(あひた)に、白髪(はくはつ)を、乱(みだ)し、栗毛(くりげ)の、馬(うま)に、打(うち)またがり二百五十、騎(き)を、一(ひと)
、手(て)に、備(そな)へ、桃井(ももゐ)の、目(め)には目もかけず、一色(いつしき)が、備(そな)へにつきかゝれば、詮秀(せんしう)もこゝを、先途(せんとう)と、戦(た)かひしが、最前(さいせん)
、助重(すけしげ)に、兜(かぶと)を、射(い)られ、頭上(つじやう)に、薄手(うすで)を、負(ひ)けるが、今(いま)手(て)いたくも、戦(た)かひしゆへ大(おほ)につかれ、百騎(ひやくき)

ばかりに。討くうたれつ。散くさん。を。乱くみだしてひきしりて。替くかわつて。大井吉見くをほみよし
み。と。戦くたか。ふ。を。満重くみつしけ。城くしろよりこれを。見くみ
やり。味方くみかた。は。最前くさいぜんより。戦くたか。ひに。疲くつかれたり。討くうたすなつづけとよ
ばわる。程くほどに。助重くすけしげが。郎黨風間くらうどうかさんま
。後藤田辺池片岡くごとうたなへいけかたをか。なんといふ。一騎當千くいつきとうせん。の。若武者くわか
むしや。三十。騎くき。ばかりに。我くわれ。をとらじとはせ。出くいたし
。味方くみかた。を。助くたす。け。戦くたか。ふたり。手負打死骸くておひうちしにかばね。をつんで。小栗方
くをぐりかた。も五十。騎くき。ばかり。打くうたれつ。合引くあいびき。に
なす。折くをり。からに。結城梶原山名くゆうきかじはらやまな。の。新手くあらて。うつてかれば。小栗方くを
ぐりかた。は。有無くうむ。を。もいわず。引くひき。かへし
。正豊重秀助重等くまさとしげひですけしげら。備くそなへ。を。魚鱗くきよりん。に。たてなをし。万字巴くま
んじともへ。ときつてかり。死くし。ねや。進くす。めと

[12 左]

。下知くげじ。を。なし。入乱くいりみだれ。て。戦ひけるかよせては。小勢くこぜい。と。あなどりて。思くおも。ひの
外に。攻くせめ。あくみ。色くいろ。めく所へ
。小栗くをぐり。が。家臣くいへのこ。池くいけ。の。庄司助長後藤大八高次くせうじすけながごとうたいはち
たかつく。と。名のりをあけてあたるをさいわひ。太刀振くたちふり
かさし。電光石火くでんくわうせつくわ。となぎたつれば。此勢くこのいきを。ひに。鎌倉方既くかまくらかた
すで。に。敗くはい。ぼくと。見くみ。へたる折から木戸
。田村くたむら。は。ふみ。止くどま。り。敵くてき。は。わづかに。小勢くこぜい。なるぞつづき給へといふ。程くほ
ど。によせては。是くこれ。に。氣くき。を。とり
。直くなを。し。しばしが。程くほど。は。戦くたか。ふたり。山名くやまな。は。是にはけまされ取てかへして。太刀
くたち。なげ。捨くすて。小栗正豊くをぐりまさとよ。と。む
んずと。組くくみ。し。は。らく。勝負くしやうぶ。も。わかたざりしが。正豊くまさとよ。は。老武者くおひむしや。とい
ひ。最前くさいせん。よりの。戦くたか。ひに。疲くつかれ
しかは。既くすて。にあやうき。其折くそのおり。から。池くいけ。の。庄司くしやうじ。かけ来たり山名が。馬くお
ま。の。肥くふと。も。を。大身くを。み。の。鍵くやり。にて
くさ。と。つけば。馬くおま。は。驚きはねあがり口ともにたをる。所くところ。を。正豊くまさとよ。したりと。馬くお
ま。より。飛くとび。を。り。早くはやく
も。山名くやまな。を。生捕くいけどり。けり。鎌倉方くかまくらがた。の。諸将衆率くしよしやうしゆそつ。が。心
くころ。は。矢くや。たけにはやれども。山名くやまな。を。敵くてき。にとりこと
され。力くちから。を。失くうしな。ひしどろになり。風くかぜ。に。木の。葉くは。を。ちらすが。如くごとく。右往左
往くうをうさをう。に。敗北くはいぼく。すれば。鎌倉勢くかまくらぜい
は。論方くろんかた。なく。兵くへい。を。まとめてひき。退くしりぞく。小栗方くをぐりがた。も。数度くすと。の。
戦くたか。ひにつかれ。貝くかひ。を。ならして。勝時くかちどき。あげ。兵くひやう。を。集くあつ
めて。城中くじやうちう。へ。こそしりぞきける。〇。かくて。両陳くりやうちん。たかひに。軍くいくさ。をと。め。小
栗くをぐり。か。城中くじやうちう。に。諸卒くしょうそつ。を。集くあつめ。て

[13 右]

.小栗父子一族くをくりふしいちぞく
.高嶺くかふれいに
.物見くものみして.敵くてき
.陳くちんを.伺くうかふ.圖くづ

[13 左]

.首くくびじゆつ.見くけんする.程くほどに.討くうちとる.首くしつ
きう.都合くつがう二百五十三.味方くみかたの.討死手負くうちしにてをいともわづかに
百一人なり池の.庄司くしやうじは.今日くけふの.軍くいくさの.生捕くいけどりたる.敵将くてきしや
う山名
.氏治くうじはるを.満重くみつしげが.前くまへにひきすへければ.満重くみつしげは.是くこれを.見
くみる.方くより
.自くみづから山名がいましめをとき.礼義くれいぎを.厚くあつ山名にむかひ
申けるは.某君くそれがしきみの御ふしんを.蒙くかふむり.蟄居くちつきよつかまつり候
所.全くまつたき.虚実くきよじつ御たゞしもなく御馬をむけられし
ゆへよんどころなく.一族くいちぞく御.敵くてきとなつたれば.滅亡くめつぼうは.近くちかきに
ありあわれ此上は小栗家これまでの.軍功くぐんこうを
おぼしめされ.讒者くざんしや一色.詮秀くあきひでを給わる
におゐては.一族自害くぞくじがいつかまつり.君恩くくんおんを
.報くほうじたてまつらんと願ひなり此おもむき

[14 右]

.御帰陳くごきちんありてよろしく.御前くごぜん御.執くとりなし.頼くたのみ.入くいりたてまつると.泪
くなみだをながしたのみしかば.山名くやまなは
.一色くいつしきと.同意くどういの.者くものなりしが.小栗くをくりか.心底別異くしんていべついな
きむねはじめ.聞くきしかば一色にあざむかれたるを
.後悔くくはうくわいして.共くともに.落泣くらくるいなし.委細くいさいとくとうけ給りさつそくとゞけ候と
て.城門くじやうもんを.出くいてける.折くをり
に十郎.助重城外くすけしげじやうぐはひにもの.見くみて.居くゐたりしが.今くいま山名が.城くし
ろをいづるを.見くみて.逃帰くにげかへるとや.思くおもひけん
のがさじやらじとおひかくる山名は.是くこれにふりかへりしか／＼と.満重くみつしげが.傳言くでんご
んのよし.語くかたり
けれど.勇雄くはやりをの十郎助重.耳くみにもいれずはつたと.白眼汝くしらみなんじも.讒者くざん
しやの一人なればのがすまじと
きつてかゝるその.儀くぎならば.是悲くぜひもなしと.大太刀くおほだちをぬきかざし小栗がハ.騎くき
のたゞ.中くなかへ山名は

.一騎馬〈いつきむま〉をのり.入〈いれ〉.兵率〈ひやうそつ〉三.騎〈ぎ〉きつて.落〈おと〉しその.身〈み〉も.
深手〈ふかて〉を.負〈おひ〉ければ.今〈いま〉は.是迄〈これまで〉とやおもひ
太刀をくわへて.馬〈むま〉よりどうと.落〈おち〉たる.程〈ほど〉に.件〈くだん〉の.太刀〈たち〉はゑりへつら
ぬき.血煙〈ちけぶ〉り.立〈たつ〉てうせにけり
助重山名が.首打落〈くびうちおと〉し.城内〈じやうない〉にはせ.来〈きた〉り.父〈ち〉が.前〈まへ〉に.持
〈もち〉きたるに満重.見〈み〉るより大ひに.驚〈おどろ〉き
.嗚呼〈あゝ〉あやまてり／＼.元来〈ぐわんらい〉山名は.直〈すぐ〉なる.人〈ひと〉ゆへ一色が.倭弁〈ねい
べん〉を.誠〈まこと〉と.思〈おも〉ひ.彼〈かれ〉と.同意〈どうい〉したる
.者〈もの〉なり.故〈ゆへ〉に.最前縄〈さいぜんなは〉をとき.礼〈れい〉を.尽〈つく〉し.我〈われ〉／＼が.罪
〈つみ〉なき.旨〈むね〉をかたりつゝ.帰陳〈きじん〉させしなり

[14 左]

とてしたすら.歎息〈たんそく〉すれども有べきにあらざればかの.首〈くび〉を.深く〈ふか〉く.納〈おさめ〉て.
扱一族〈さていちぞく〉を.集會〈しうくわひ〉
して申けるは今日の.戦〈たゝか〉ひ.味〈み〉かた.十分〈じうふん〉の.勝利〈しやうり〉なれば.最早〈もは
や〉心にかかる.雲〈くも〉なし.自害〈じがい〉せんと
思ふなり助重一人此世に.止〈とどま〉り.時運〈しうん〉をはかり.倭臣〈ねいじん〉一色詮秀が首をとりて
父をはじめ
一族のめん／＼へ.黄泉〈くわうせん〉の.手向〈たむけ〉に.備〈そな〉へよと申ければ助重是をきくよりい
かでさる事の
候べき.切腹〈せつぷく〉して.命途〈めいど〉の.御供〈をんとも〉つかまつらと思ひつめたる.有様〈ありさま〉
に満重かさねて申ける様
.汝〈なんぢ〉は.父〈ち〉が言葉をそむき此謀中にて.自害〈じがい〉せば.當家〈とうけ〉の.血統〈けつと
う〉長く.絶〈たへ〉なば.先祖〈せんぞ〉へたいし
.不幸〈ふかう〉なるぞさなくば.親子恩愛〈おやこおんあい〉のきづなをきつて.勘當〈かんだう〉なりといか
りを.含〈ふく〉み
て申ければ助重ちからなく父の言葉を.逆〈そむ〉きがたく.跡〈あと〉へ心はこのれども十.騎〈き〉の
.郎黨〈らうどう〉ひきつれてからめての小門より.何國〈いづく〉ともなく.落〈おち〉ゆきけり城中に.残〈の
こ〉りたる
.人〈ひと〉／＼には小栗孫五郎.満重〈みつしげ〉.伯父〈おぢ〉助兵衛.正豊〈まさとよ〉同次郎右エ門.重
秀〈しげひで〉.郎黨〈らふどふ〉には.風間〈かざま〉
.新〈しん〉六.政為〈まさため〉同.新〈しん〉助.正明〈まさあきら〉.片岡嘉〈かたおかか〉兵衛.晴正〈はる
まさ〉.水戸〈みと〉五助.長末〈おさすへ〉これ.等〈ら〉をはじめとして
.主従〈しゆう／＼〉十三人こかしこに.火〈ひ〉をかけて.皆々生害〈みな／＼しやうがい〉なす.程〈ほど〉
に火は.諸方〈しよほう〉にもへうつり

[15 右]

.一面くいちめんの.炎くほのをとなりしかば.寄手くよせては.火くひの手くてのあがるを.見くみてわれも／＼と.城中くしやうちうへこみ.入死害くいりしがいを
いち／＼あらたむるに助重は見へざりけり.足利左馬頭持氏朝臣くあしかゞさまのかみもちうじあそんは小栗.一族くいちぞくを不日に
.御退治くおんたいちありて.鎌倉くかまくらへ.御帰館くごきくわんありそれ／＼に.恩賞くおんしやうをそ給わりける.然くしかるに.京都くきやうとより
.執権上相安房守憲実くしゆつけんうへすぎあわのかみのりさね.下着くげちやくして小栗が始末をつぶさにき.大くおほひに.驚くおどろき御前へ
出て申やう小栗は.忠臣無くちうしんむ二にしてすこしもわたくしなくことに満重が父なる重視は.京都くきやうとよりの.附人くつけびとなれば.得くとくと御たゞしもなく.疎忽くそこつ.の.御征罰くごせいばつおそれながら御.落度くおちどなるべし
と小栗が.罪くつみなき.旨くむねをいち／＼.証古くしやうこを.言上くごんじやうするにぞ鎌倉殿はなただ.後悔くかうくわいの御有
さまなりければ一色.詮秀面目くあきひでめんぼくなく.病氣くびやうきといつわりしばらく.蟄居くちつきよしてゐたりける
が今度小栗一家.滅亡くめつぼうするといへども十郎助重が.行衛知くゆくゑしれざれば.若くもし上相が.吹拳くすいきよ
によつて彼をめしかへさるゝに於ては身の上の一大事なり.何卒尋くなにとぞたづねいだしてうしなわんものをと心を.碎くくたくといへとも上相御前にあつて.自由くじゆうならねば.謀計くぼうけいをもつて
憲実を罪に.落くおとさんと.虎狼くこうろうの心をさしはさみ深くも.悪謀くあくけいをたくみける

[15 左]

第二回

小栗十郎.助重くすけしげは.主従くしゆう／＼十一.騎くき.父くちの.遺命くいめいもだしかたく.應永くおうゑひ三十年九月三日.常陸くひたちの
.居城くきよじゆうを.忍くしのび.出くいでつ時を.待くまちて.上相くうへすぎにつき.君くきみの.御勘気くごかんき御めんを.願くねがはんものをとて.姿くすがたを
やつし.身くみをしのひて.鎌倉くかまくらのほとりなる.権現堂くごんけんどうといへる.所くところにし
ばらく.旅宿くりよしゆくして.居くゐ
たりけるこに.横山大膳安秀くよこやまだいぜんやすひでといへる.者くものあり.暴悪不道くぼうあくふ
どうの.者くものなるが.前くさきの.管領氏光朝くはんれいうじみつあ
.臣くそんの.時くとき.御勘當くごかんとを.蒙くかふむり.民間くみんかんにくだりけれども.鈍欲邪
見くどんよくしやけん.の.悪物くわるものにて.浮くうかべる.雲くくもの.富くとも
に.沈くふけり.傍若無人くぼうじやくぶにんにふるまひけり.然くしかるに.此横山くこのよこやまが.養
女くやうちよに.照手くてるてといへる.一人くひとり.の.娘有くむすめありて
.容色くやうしよくたぐひなき.美人くびじんにて.詩歌連俳琴碁書画くしかれんはいきんきしよくはい
ふもさらなり.女くをんなの.手業何くてわさなにくれ

となく、習くならひおぼへて、天性才くてんせのさいたけ、武藝くぶげいにもくらからずこれかために、近郷くきんがうの、若士玉章くわかさむらひたまづさに
.思くをもひを、述くのべていよいよ、照手くてるての、心くころにかなふはなくことさら、深尽くしんそうのうちにあれば、踏くくつを、隔くへた
てかゆきをこらへ、垣くかきをおきて、物くものいふごとく、辺くほとりへさへよる、事くことあたわさればいたづらに、心くころを
なやます者のみ、多くおほかりける、照手姫くてるてひめは、日頃くひごろ、江くゑの、島弁才天くしまべんざいてんを、信仰くしんかうしつ、折々くおり／＼あゆみを

[16 上段]

はこひけるがけふしも、忍くしのびて、腰元女童下部くこしもとあまわらべしもべともにやうやく、三人くみたりばかり、供人然くともひとしかるへ
かつぎまぶかに、打くうちかつぎて、金亀山くきんきさんに、詣くもふでつ、足くあしはやに、下向くげかうなし、宿所くしゆくしよをさして、急くいそく
.折くおりしもいたく、酔くゑひたる、若士くわかさむらひの、三人くみたりつれだちつ、羽衣くはころもの、謡声くうたいこわ
.高くたかにうたひつ、一歩くいつほは、高くたかく、一歩くいつほは、低くひくく、滄々くさう／＼、浪々くらう／＼として
.足くあしもしとろにきたりしが、照手主従くてるてしゆう／＼の、女くをんなつれなるを
.打見くうちみやり、左右くさゆうより、立くたちふさがり、瓢箪くひやうたん、吸筒くすびつ
.取くとりいだし、盃くさかつきさしつけ、照手くてるての、袖くそでにしなだれかかり
.是くこれはいづれの、姫くひめにてあるかしらざれども、江くゑの、島くしま
.詣くもふでと、見くみうけしなり、某等くそれがしらも、勤役くきんやくの、間金亀山くいとまきんきざんへ
.詣くもふでるなり、袖振くそでふりあふも、他性くたしやうの、縁くゑん、當山くとうざんの
.神躰くしんたいよりなをも、尊くとふとき、御来光くこらいくはうの
.御顔くをんかほばせを、拝くはいしまつるは、下世話くげせわにいへる
.生くつきた、弁天持くべんてんもちあわせたる、神酒くみきひとつ
そなへまつらんと、一盃くいつさんすご
してそれがし、等くらが、信心くしんじんの
.誠心くまこころをあはれみ給ひて、普通くふつうの
.利益くりやく
をゑさせ
給へと
さかづ
き

[16 下段]

.取<とり>たしさしつくれば
.酒狂<しゆきやう>の.者<もの>と.腰<こし>もと
.下部立<しもべたち>ふさがりて
へだつるを.彼三人<かのさんにん>
の.武士<さむらい>は.眼<まなこ>を
すへてはつたと
.白眼邪<くろくろにらみじやま>
ひろく
.匹婦下郎<ひつふげらう>
ざんじの.間<あいだ>
.姫<ひめ>をかりるに
わいらか.知<し>つた
.事<こと>にやあらん
.直<すぐ>にかさばそれで
よしさゝゆるならば

[17 右]

からき.目見<めみ>せんと.姫<ひめ>が.前後<ぜんご>に.附<つき>まとひ.左右<さゆう>の.手<て>を.採
<とり>しなだれかゝれば.姫<ひめ>はあな
やとふりはらふを.猶<なを>こりずまに.打<うち>よりて.手籠<てこめ>にせんとするおりから小栗十郎
.助重<すけしげ>はこれもをなじく.弁才天<べんざいてん>へさんけいの.戻<もど>り.足女<あしをんな>
をとらへて.武家<ぶけ>の.身<み>がかく
までみだりの.有様<ありさま>を.見<み>るに.忍<しの>ひずはせよりて.一人<ひとり>の.武士<ぶし>が
ゑりがみ.掴<つか>みもんどり
うつてずでん.倒<どう>これにおどろく.一人<ひとり>の.武士刀<ぶしかたな>にそり.打大音<うちだいを
ん>あげ.何者<なにもの>なれば.我々<われ／＼>
が.遊山<ゆうさん>のさまたげ.奇怪<きつくわい>なり.覚悟<かくご>をせよと.一同<いちどう>に.身<み>
がまへなせば.冷笑<あざわら>ひされは
.身<み>どもは.青雲<せいいうん>をふみはづしたる.天竺浪人<てんじくろうにん>.貴殿<きでん>たちは仕.
官<くはん>の.身<み>の.女<をんな>をとらへて
この.場<ば>の.仕義<しぎ>は.武士<ぶし>ににげなき.人面獸心對刀<にんめんじうしんたいとう>の.手
前<てまへ>も.耻<はぢ>づかる.所業<しよぎやう>は.何事<なにこと>な
るや.士<し>は.合<あい>たがひ.武門<ぶもん>の.耻辱是<ちぶよくこれ>を.制<せい>するあやまりなる
かと.優然<ゆうぜん>として.有<あり>けれ
ば.三人<みたり>の.武士<ぶし>は大ひに.怒<いか>り.物ないわせぞ.打<うち>とれと.氷<こふり>の.刃
拔<やいばぬき>かざし.前後左右<ぜんごさゆう>へうち
かゝればしや小しやくなるうち.虫<むし>めら.血汐<ちしほ>を.染<そむ>るは.刀<かたな>のけがれと.腰
<こし>なる.鉄扇<てつせん>ぬき

.持<もち>つゝあなたこなたへ.飛鳥<ひちやう>の.如<ごと>く.一人<ひとり>の.刀<かたな>うちおとしと
られんとするを.鉄扇<てつせん>にて

[17 左]

.三眉<みけん>を目がけてはつしとうてば目くるめきて.倒<たを>るゝ所を.左右<さゆう>の二人りはなを
こりずまにうちかゝるを.一人<ひとり>の.脇腹<わきばら>はつしとけあげ.今<いま>一人の.首筋<くひす
ち>つかんで目
より高くさし上つゝ.濱辺<はまべ>の.砂<すな>にめりこむ.程<ほど>ちからにまかせて.打<うち>つくれば
此はたらきに
.辟易<へきえき>して.頭<かしら>を.抱<かゝ>へ.腰<こし>をさすり.雲<くも>を.霞<かすみ>と.逃消<に
けさり>けり.照手主従<てりてしゆう／＼>は此.有様<ありさま>を見るよりも
.何<なに>か.腰元<こしもと>に.打<うち>さゝやけば.腰<こし>元は小栗が.側<そば>にいたり.小腰<こざ
し>を.屈<かゞめ>いつれの殿に渡らせ給ふ
や.只<ただ>今の.生酔<なまゑひ>が.忍<しのび>の.供<とも>の.小勢<こぜい>をあなどり.狼籍<らうせ
き>におよびしを.君<きみ>にすくわれ
たてまつり.恙<つつが>なきことをゑたりわらはが.主<しゆう>は.鎌倉<かまくら>のハツセ.郷<がう>にか
くれなき横山殿
の.息女<そくぢよ>なり.君<きみ>の.御館<みやかた>御名までうけ給りはへりて.後日<ごにち>御.礼<れ
い>ながら.参上<さんじやう>せんと
.念<ねん>ごろに.問<とい>かくれば小栗は.衣服<いふく>の.塵<ちり>うちはらひ.某<それかし>ことは.
故<ゆへ>あつて.浪<ろう>／＼の
よるべなく.何所<いづく>と.定<さだ>めぬ身の.上<うへ>なり女子.連<づれ>もなんぎを見うけこらへか
ねて.今<いま>の
.次第決<しだいけつし>て御.礼<れい>の御.沙汰<さた>におよばす.御縁<ごゑん>もあらはまた.重<か
さね>てとゆかんとするを
.袖<そで>ひきとめ御.浪々<らう／＼>の御身なれば.旅宿<りよしゆく>こそ候べしあかしたまへと.再<さ
ひ>三.問<と>われて

[18 上段]

すげなくもいゝかね
つゝ.権現堂<こんげんどう>の
.旅宿<りよしゆく>をあかし
わかれてこそは
かへりけれ
○ さて
.小栗助重<くりすけしけ>は
.権現堂<こんげんどう>の.旅宿<りよしゆく>
にもどりつゝ

.家<いへ>の.仇<あだ>たる
.一色<いつしき>が.様子<やうす>
を.探<さぐ>れども
.悪害堅固<あくがいきんこ>に
かまへたればさら
に.事情<しじやう>も
わかち.難<がた>く
此ごろは
.十騎<しつき>の
.郎黨<らうどう>
それ／＼
に.姿<すがた>
をやつし
.日々<ひび>.鎌倉<かまくら>の
.町<まち>に入こみ

[18 下段]

かたきの.実否<じつふ>をさぐら
せける.中<なか>にも.後藤兵<ごとうひやう>助は
.小間物商人<こまものあきんど>に.身<み>をやつし
.大小名<たいせうみやう>の.館<やかた>にいり
こみ.世<よ>の.風説<とりさた>を
うかづふ.程<ほど>に
けふしも
.荷箱<にばこ>.背<せ>
.負<おひ>つゝ.声<こゑ>
たか／＼と
.香具<かうく>の数
.品<しん>をよび
たつれば
.郷士<がうし>の.別荘<べつそう>とも
みへし.構<かまへ>より.下部<しもべ>
一人はせきたり御
.勝手<かつて>にて.腰元<こしもと>たちが
.小間物<こまもの>の.御用<こよう>ありと
よひ給ふにこなたに

[19 右]

きたれとよばわれは、後藤〈ごとう〉は
下部にうちつゞき
・勝手〈かつて〉にいたれば、何〈なに〉
くれとしな／＼を
あきなひつゝ夫より日
経てまた／＼かしこへいたり
・後〈のち〉には日々に、出入〈でいり〉つゝ
・腰〈こし〉もとの、女達〈をんなたち〉が、諸〈しよ〉
・用〈よう〉など、足〈た〉しつゝ
ありける、程〈ほど〉に横山が、別荘〈べつそう〉
なることを、知〈し〉りこの横山こそ、主家〈しゆうか〉
の、仇〈あだ〉たる一、色〈しき〉と、交〈まじわ〉り深きよし、聞〈き〉

[19 左]

およべは、手蔓〈てづる〉を、得〈え〉たりと、心中〈しんちゆう〉によろこびつゝかしこに、出〈で〉入おりからに
は、腰〈こし〉もと
の、女子〈をなご〉たちと、浮世雑談〈うきよざうだん〉なにくれと、兎角〈とかく〉心に、叶〈かな〉ふ事など、物
〈もの〉がたれば、兵助〈ひやうすけ〉
の、来〈き〉たる日を、待〈まち〉かねて二なき、者〈もの〉におもひけりある日、兵〈ひやう〉助はまた横山か、
館〈たち〉にいた
り、品物〈しなもの〉をひさぎつゝ、物語〈ものがたり〉してありし、程〈ほど〉に、此別館〈このべつやかた〉に
みやづかへする、田毎〈たごと〉といへるが
・兵〈ひやう〉助にうちむかひそもじ、達〈たち〉は、鎌倉〈かまくら〉中の、武家〈ぶけ〉町かたまでも、手廣〈てひろく〉
びろく、業〈なり〉はひなす
・物〈もの〉ならん、権現堂〈こんげんどう〉のほとりへも、出入〈いでいる〉ところの、有〈あり〉けるやと、子細
〈しさい〉ありげにたづぬる
にぞ、兼〈かね〉て、主〈しゆう〉なる助、重〈しげ〉のはなせしこともありけるほどに、後藤〈ごとう〉は、心〈しん〉
中に、笑〈ゑみ〉をふく
みさん候、権現堂〈こんげんどう〉の、近辺〈きんへん〉のはのこりなく、商〈あきな〉ひにまいるなれば、何所〈いづこ〉
といふて、知〈し〉らぬ
・家〈いへ〉はこれなしとこたゆるにぞ、田毎〈たごと〉はすりよりて、声〈こゑ〉をしそめさうなればこれを
・問〈とは〉んがかならず、他言〈たごん〉は、無用〈むよう〉なり、別義〈べつぎ〉には候はずかの、辺〈ほとり〉
に、旅宿〈りよしゆく〉せるかやう／＼の
・浪人〈ろうにん〉をば、知〈し〉らざるやと、再〈ふた〉び、問〈とわ〉れて、兵〈ひやう〉助は、如何〈いか〉に
も、知〈し〉りて候なりとまめだ
ちてこたゆるにぞ、田毎〈たごと〉は、声〈こゑ〉をしそめさすればそもじが、知〈し〉る、人〈ひと〉ならば、是〈これ〉
さいわひの

[20 右]

.便義くびんぎなり.彼人くかのひとにわらはが御.目くめにかゝり.厚くあつくも.礼くれいを.述くの
ぶべきなれとみやづかへの身の
.心くこころにまかせずけふまでもうちすきしなりそのゆへは.主くしゅうの.娘照手くむすめてるて姫が
江の.島くしまもふて
のかへるさに.狼藉くろうぜきに.出くいであひて主従なんぎに.及くおよびしを.彼くかのよしありげな
る.浪人くろうにんにすく
われし.始くはじめをいへばかやう／＼.終くをわりをはなせばしか／＼と.念頃くねんごろににかり
つゝ.何卒くなにとそそもじが
かの人にゆき.合くあふことのありしおりに.此玉章くこのたまづさをとづけてたべとふくさにつみし.一
通くいつつう
を.兵くひやう助にゆだねければ.後藤くごとうはさつそく是をうけがひて.横山くよこやまが.別館くへつ
やかたを.立出くたちいでつゝ.旅宿くりよしゆく
に.戻くもどり.主くしゅうなる助.重くしげにかくといげ.照手くてるて姫が.玉章くたまづさをとりにだ
し助.重くしげにわたしける
にぞ.助重くすけしげは.手くてばやくうち.開くひらき.是くこれを.讀くよむにさきごろ.狼藉くろうぜ
き者に.出合くであいしおりから
.君くきみにあやうきをすくわれたてまつりし事の.悦くよろこばしさなどこま／＼と.礼くれいをのべた
る.文くぶん
.章くしやう.筆勢妙くひつせいめうにして.麗くうるわしく助.重くしげも.照手くてるてが.才能くさい
のうおもひやられつゝそのかへし.言くごとを.後藤くごとうに
もたせてまた／＼かしこに.遣くつかわしける ○ さても横山が.別荘くへつさうには.照手くてるて姫.
腰元くこしもとの.田毎くたこと
はからひにてはからずもあやうきを.救くすくはれし.情人くこいびとの.住家くすみかも.知くしれしよし
なれはその

[20 左]

.返事くへんじをさへ.待くまつをりに.小間物賣くこまものうりの.兵助くひやうすけがきたりて.助重
くすけしげの.返書くへんしょをたづさへきたれ
ば.念くねんあることにおもひつゝかの.浪人くろうにんのけだかき.風俗くふうぞくのみかは.文武くぶん
ふかしこき.勇雄くますらをなるその
.系圖くけいづさへよしあるなど.兵くひやう助が.話くはなせしを.田毎くたことよりうちきゝて.凡くをよ
そ女子と.生くむまれたらん
にはかの.君くきみの.如くごとくなるを.生涯くしやうがひの夫と.定くさだめは.誉くはまれならんとひ
たすらにあこがれ.今一目くいまひとめ
.逢くあふことのありなば思ひをのべて.赤心くまこころをあかさばやと.朝暮小栗くちやうぼおくりがこ
とのみ.思くおもひて

はては、恋病〈こいやみ〉の、床〈ゆか〉に、伏〈ふし〉うつ／＼として、有〈あり〉ければ、腰元〈こしもと〉の、田毎〈たごと〉はこれをさとり、香具屋〈かうぐや〉の、兵〈ひやう〉助がきたるを、待〈まち〉つゝ、章〈ふみ〉こま／＼としたゝめて小栗が、元〈もと〉へことづてけるにぞ
・助重〈すけしげ〉も、木石〈ぼくせき〉ならねば、照手〈てるて〉が、容色〈やうしよく〉はさらなり、女子〈をなご〉に、似〈に〉げなき、才〈さい〉あるを、聞〈き〉しり
かつはかれか、養父〈やうふ〉なる横山は、仇〈あた〉たる、一色〈いつしき〉と、黄金〈こがね〉をたつの、交〈ましは〉りあるよしこれくつきやう
の、手〈て〉かゝりと、密〈しそか〉に、後藤〈ごとう〉にうち、連〈つれ〉だちかしこにいたり、腰元田毎〈こしもとたごと〉かはからひにて
・忍〈しの〉ひあふ、夜〈よ〉の、数〈かず〉を、重〈かさね〉て、深〈ふか〉き、中〈なか〉とぞなりにけり ○ されば、照手〈てるて〉姫か、養父〈やうふ〉なる横
・山大膳安秀〈やまだいぜんやすひで〉は、男子〈なんし〉はらから五人あり、嫡子〈ちやくし〉を太郎、安次〈やすつぐ〉といふ、二男〈しなん〉次郎、安春〈やすはる〉と

[21右]

いふ此二人りの、兄弟〈きやうだい〉は父に似ず、親〈をや〉の、悪逆〈あくきやく〉なる事を、明暮〈あけくれ〉心をいためける三郎、安武〈やすたけ〉
四郎、安高〈やすたか〉五郎安長は、父〈ち〉にをとらぬ、佞姦邪智〈ねいかんじやち〉にて、傍若無人〈ばうじやくふじん〉にふるまひつゝ父が
・悪意〈あくい〉をたすけける、照手〈てるて〉姫は横山が、実子〈しつし〉にあらず七才の、時〈とき〉、陸奥〈みちのく〉より人、買〈かい〉がつれ
きたるを、銭〈ぜに〉十二、貫〈くわん〉文に、買〈かひ〉とり、容色勝〈ようしよくすぐ〉れたれば、生長〈せいちやう〉の、上〈うへ〉三郎、安武〈やすたけ〉が、妻〈つま〉にせんと
・養〈やしな〉ひたりしが、今年〈ことし〉二八の、春〈はる〉をむかへし、程〈ほど〉に三郎とめあわせんと、婚禮仕度調〈こんれいしたくとゝの〉ひし
を、照手〈てるて〉姫は三郎が、暴悪〈ぼうあく〉をうとみさらにとくしんせざりければ、横山〈よこやま〉は大ひにいかり
・扇ヶ谷〈あふきがやつ〉の、別荘〈べつさう〉にをしこめ、置〈おき〉しが、此〈この〉ごろ、権現堂〈こんげんどう〉の、辺〈ほとり〉に、旅宿〈りよしゆく〉せる、浪人〈らうにん〉と、照手〈てるて〉
が、忍〈しの〉び、逢〈あ〉ふよしをもれきゝつゝいよ／＼、怒〈いか〉りて、殺〈ころ〉さんとさわきたつを三郎、安武〈やすたけ〉
これをとゞめて、父〈ち〉にむかひ、某先〈それがしさき〉ごろ、故〈ゆへ〉ありてかの、権現堂〈こんげんどう〉に、旅宿〈りよしゆく〉せる、浪人〈らうにん〉のすじ
やうを、正〈たゞし〉たりしがかれは、常陸〈ひたち〉の、小栗〈をぐり〉が、嫡男〈ちやくなん〉十郎、助重〈すけしげ〉といふ、者〈もの〉なるよしきやつ、小〈を〉ぐり
にてありなば、兼〈かね〉て、一色詮秀〈いつしきあきひで〉どのよりない／＼たのみの、事〈こと〉もあればたばかりよせ

て.打くうち>とらんと.心くころ>におもひ候.得くえ>どもかれには.十騎くじつき>の.郎黨くらうとう>ありて
その.強勇くがうゆう>かくれ

[21左]

.後藤兵助くごとうひやうすけ>は.小間物賈くこまものうり>に
.姿くすがた>をやつし.横山くよこやま>が.別荘くべつさう>に
.入込主くいりこみしゆう>なる.助重くすけしげ>を.照手くてるて>
が.元くもと>へ.蜜くしそか>にみちびく.圖くづ>

[22上段]

なしゆへに.容易くやうい>に
かゝる.時くとき>は.毛くけ>をふき
.痛くきず>をもとむる
.業くわさ>とその.俣くまゝ>に
さしおきし
なれば.照手くてるて>
と.蜜通くみつづ>
せしこそ
.幸くさいわ>ひ.彼くかれ>を
ゑばとし.謀計くぼうけい>をもて.小栗くをぐり>めを
やす／＼と.討くうち>とらんこと.袋くふくろ>のものを
とるよりやすし.我等くわれら>にまかせ給へとて
.父くちゝ>と.蜜くひそか>にさうたんなしつゝ
.次くつき>の
日小栗が
.旅宿くりよしゆく>を
さして
使者を
つかわし.聲くむこ>に
とらんといゝ入けるにぞ
助重はかねて横山の
.暴悪くほうあく>を.知くし>るといへどもかのかたへたち
入なばつけねらふ.一色くいつしき>が手づるにもや
ならんかと十.臣くしん>に.談合くだんかう>なし横山か方へ

[22下段]

いたらんと
.心くころ>を.定くさだめ>ける

かくて、其日〈そのひ〉
になりければ
・助重〈すけしげ〉は十、騎〈き〉の
・郎黨〈らうどう〉と、打〈うち〉つれ
だち、横山〈よこやま〉か、館〈やかた〉に
いたり、照手姫〈てるてひめ〉と
・婚姻〈こんいん〉の、儀式〈ぎしき〉も
とゝのひける横山
の、一族父子〈いちぞくふし〉は助重を聲
となしおりを、窺〈うか〉ひゐたり
けれども
十人の
家臣
・昼夜助重〈ちうやすけしげ〉が
・側〈そば〉をはなれず、附〈つき〉そひければすべき

[23右]

やうなくすごしけるがこの、横山〈よこやま〉のかたに、一疋〈いつひき〉の、荒馬〈あらま〉ありさきつ、頃奥
脇〈ころおうしう〉よりつれ
・来〈きた〉りし、名馬〈めいば〉なれどもあらくして、乗入〈のりいり〉する、者〈もの〉を、喰〈くら〉ひつき又は、
蹴殺〈けころ〉しするゆへに、近〈ちか〉よる
ものもあらざるゆへせんかたつきて、奥庭〈おくには〉なる、高藪〈たかやぶ〉の、中〈なか〉へつなぎ、置人々
〈おきひと／＼〉おそれて、鬼荒〈をにか〉
・毛〈げ〉と、名〈な〉つけたり三郎、安氏父〈やすうしちう〉にいふやう、究竟〈くつきよう〉の事こそ候なれ、高
藪〈たかやぶ〉につなぎたりし
・鬼荒毛〈おにかげ〉に、助重〈すけしげ〉をのせ、喰殺〈くひころ〉させんと手はづをきはめ、大膳〈だいぜ
ん〉はある、日小栗〈ひをぐり〉を、呼近付〈よびちかづけ〉
鬼荒毛を、引〈ひき〉いだしいへるやう、我聲〈わがむこ〉の、手〈て〉のうちは、腰元〈こしもと〉どもより、噂〈う
わさ〉には、聞〈き〉およべり
さりながら、馬術〈はじゆつ〉は、軍〈いくさ〉の、專要〈せんやう〉なればこれ、等〈ら〉もきわめて、勝〈すぐ〉れ
たらん、一鞍〈ひとくら〉のりて、見〈み〉せ
給へと、余義〈よぎ〉なき、所望〈よもう〉にうけ給り候とて、股立〈もゝたち〉とりあげ、鬼荒毛〈をにかげ〉のそ
ばへいたり
・荒馬〈あらうま〉なるをこゝろ得てひらりと、飛乗優然〈とひのりゆうぜん〉とまづ、輪〈わ〉のりをしてしづむ
れば
さしもにあらき、駿馬〈しゆんめ〉なれども、名譽〈めいよ〉の、小栗〈をぐり〉に、乗〈のり〉まわされたちまち、
助重〈すけしげ〉の、自〈じ〉

.由<ゆう>になりて.碁盤<ごばん>のり.階子<はしご>の.曲種々<きよくしゆ／＼>の.曲<きよく>を.乗
<のり>ければ.横山父子<よこやまふし>をはじめとし.人々<ひと／＼>
あきれしばかりなりさらば三郎の.謀計<ぼうけい>も.□□<むなしく>なりけるにぞ.安氏<やすうじ>はまた
もや

[23左]

.姦<かん>計をめぐらしつゝ毒酒をもて害さんといひけるを太郎次郎はさま／＼に諫むれ
とも大膳三郎あへてこれを聞入なければ.歎息<たんそく>しつゝ此ことを照手か元へ知らせけり
さても.毒酒<どくしゆ>に評義きはまりければ祝義をかこつけに小栗主従を呼つとへ□に酒宴
におもひけるか始めは常の酒をいたし十人の郎黨同席にてさいつおさへつする折
しもかなたの山より手負猪のいつさんにかへ出で横山か.庭前<ていぜん>の筑山を.踏崩<ふみくつ>し
座敷へと飛あかり.障子屏風<しょうしひやうふ>をおしたをし裏のかたへかけゆきけるにそ十人の小栗
郎黨等はあわれ能宥こさんなれとかけいたし猪をしたふておひゆきければ時分
はよしと横山は三郎に目くはせして毒酒を小栗に.進<すす>めけるにそ照手は太郎次
郎より兼てきゝ知る夫の急尼いかゝはせんと心は.転倒調<てんとうしらへ>かけたる.琴<こと>ひきよせ
.高野<たかの>の奥の玉川の水と操かへし唄ひけるにそ助重はさこそとすゐし呑ふり
にてかたわらへ捨たりけり盃の.数<かず>重りて小栗助重裏のかたへつとはしりあゝ
苦しや.湛<たへ>かたや.扱<さて>は毒酒でありけるや今此酒をのむとひとしく俄にこゝろ

[24右]

.脳<のう>乱するは只ことならすたはかり殺すは此興なりみよ／＼今におもひえ知らさ
ておかんとはやくも.藪<やぶ>にはしり入つなき置たる鬼.鹿毛<かへ>にひらりと打のり
かけいたせはのかさじものと三郎安武かたへにありあふ毒酒の壺をその俣取て
打つくるに小栗は.顔<かほ>より肩先かけて半身.毒<どく>をあひたりけるされとも助重見
むきもやらす一さんにかけいたし.行方<ゆきかた>知れすなりにけり助重の郎黨十騎の勇
士は猪を手とりになしつゝも元の席に立かへるに主なる小栗は居合せす座敷は
あれて.杯<はい>盤.狼藉<らうせき>あたりに人氣もあかさればこは如何に主人は何所と怪むところへ
横山兄弟手の者ひきつれりゝしく出立十人をおつとりまきヤア／＼小栗か家臣
のめん／＼汝にもふしきかず次第あり小栗十郎助重は年来.叛逆<ほんきやく>の企ありて常
陸の居城にたて籠り鎌倉殿に弓弦て御.敵<てき>となつたる落武者からめとつてさし
いたせと一色殿より兼て内意我黨の謀.計<かと／＼>にて色にことよせおひきよせ毒酒
をもつてかしのふたれは.汝<なんし>らいか.程<ほど>勇ありとも主にはなれし.羽拔鳥<はぬけとり>した
はた

[24左]

せすと.縄<なは>かゝれ手むかひなさは打とらんと大音上に.呼<よは>われは十騎のめん／＼齒が
みをなし有無をもいわす抜つれてあたるを幸ひなきたつれはすわやものとも打とれ
と下知をつたへてうつてかゝれは心得たりと十勇士八方へ眼をくはり大わらはにては

たらきつゝ摩利支天の荒たることく三郎兄弟辟易してはしめの廣舌似もやらず
こは叶わじと一同に奥殿さして引ひりそくを何処までもとおわんとすれは池の庄司し
ばしと止めかた／＼陳忽のふるまひあるな主人の安否しれさるうちに深入するは思慮
なきなり若横山か為にうたれ給ふにきわまは再び来りて彼、等くらゝ父子をみちん
にせん事いと安しかた／＼いかゞと開けるにそ水戸小太郎後藤大八はせきたりて庄司
にむかひ主なる小栗殿は、智謀くちぼうゝ勝れし人なるゆへいかでかかれらの、佞くねつゝ心の、毒くどくゝ
酒にあ
たりやみ／＼とうたれ給ふへきとくに此湯は、落失くおちうせゝ給ひしならん我々も先一と度
、此くこのゝところをしりそきて後日評義を決すへしときくよりも田辺平六すゝみいでつゝ
、実くげゝにもつともなる、言葉くことばゝかな東海道なる藤沢の道場こそ主人とは俗縁ながらしたし

[25右]

しき中でをわすれば
かしこにこにこそ
落付給ふ
らん急がせ
給へおの／＼
とうち連だちて足早に
藤沢さしてはせゆきける

[25左]

第三回
小栗助重は今日横山の
虎口をのかれ東海道なる
藤沢の清浄光寺の現住たりし
浄阿上人は母かたの伯父
なればかの鬼鹿毛に打
のりつゝざんじの
うちにはせきた
り上人に戦面なし
今日の次第をかたりけるうち十騎の
朗黨たつねきたり主従無事を喜悦つゝ
横山父子が悪逆なるかつは照手が貞操蔚

[26下段]

義さぞかし
跡にて憂
目にあわんと

語り合つゝ心を
ぞなやましける
かくて小栗は
上人に打むかひ
参横山が盛たる毒
酒を呑たる体にてのがれ
来れる事なれば當寺
にて空しくなりしと
披露あり十人
の.郎黨等くらうどうらも.主人くしゆじん>の
わかれをかな
しみて
のこらず.順死くじゆんし>
せし.間くあいだ>.火葬くくわさう>に
して.埋くうづめ>たりと
おゝせありなば
かたき.一色くいつしき>
□□□□く□□□□>
□□

[26 左上]

.小栗くをぐり>
.助重鬼鹿毛くすけしけおにかけ>
をはしらせて
.毒酒くどくしゆ>の.難くなん>を
さくる

[27右]

.横山父子くよこやまふし>も心をばゆるしかふすべし.若くもし>横山が.方くかた>よりたづね.来くき>たる
その.折くおり>には.証古くしやうこ>正
くては.叶くかな>ふましとて.小栗くをくり>をはじめ.郎黨くらうどう>の.衣類くいるい>.大小くたいせう>と
り.揃くそろ>へ上人の御前へさしおき
.願くねが>ひけるにそ上人.聞くき>.給ひつゝ人をいつわるは.出家くしゆつけ>の.本意くほんい>にあら
ねども今かた／＼の
.急くきう>なんをすくわんと.虚言くきよごん>なれば.仏くほとけ>もゆるさせ給ふへし.釋尊くしやくそん>
の.比喩方□くひゆほうへん>も.衆生くしゆじやう>
.済度くさいど>のためなればあながち.破戒くはかい>にはあらさるへしと.心くこゝろ>よくうけかび給ひあ
またの.骸くしかばね>

をとりよせつゝ、火葬くくわさうとなし、塚くつかをつきて、小栗主従くをぐりしゆうしゆの、墓碑くはかしよとぞなづけけり

○ かくて、小栗助重くをくりすけしげ、主従くしゆうじうは、藤沢山くとうたくさん、の、霊場くれいしやうを立いで、三河くみかわの、國くくにへ、落行くおちゆきけるが世を、忍くしのぶ

身の助重は小二郎、兼氏くかねうじと、変名くへんみやうしつ三河に、落付くおちつき、居くゐたる、程くほどに十人の郎黨とひとつ

に居てはいかゞなりとて、後藤池風間くごとういけかざまをはじめみな、鎌倉くかまくらと、本國くほんこくへいたりかたきの

様子くやうすをさぐりこよとてつかはしける ○ さても助重は小二郎と、変名くへんめうしつ三河に、隠くかくれ、住居くすまゐして、鎌倉くかまくらの、安否くあんぴをきかんと、郎黨くらうたうをかしこへつかわし時、日くしつを、待くまちてありける

程くほどにさいつころ横山が、館くやかたを、立退くたちの、時三郎、安武くやすたけが、為くために、毒酒くとくしゆの、壺くつぼを打つけられ

[27左]

その、折くをりは、何事くなにごともなかりしが、日くひを、経くへる、程くほどに、半身くはんしんしびるゝやふにおぼへけるが、次第くしだい／＼

に、惣身くさうしんへ、廻くめぐり、面體くめんたいへ、發毒くはつどくして、腫くはれいたむこと、堪くたへがたくさしもすぐれし、好男子くこうなんしの、数くす

日くしつに、頭くかしらの、髪くかみもぬけはて、肉くにく、破くやぶれ、口汁くうはしるしたゝれ、終くついには、俄鬼病くがきやまひのごとくなり、果くはてければ

人々くひと／＼は、忌くいみきらひその、香くかのあしきに、側くそばへもよらず、此世くこのよの、人とは、見くみへざりけり

○ 爰くこゝに、藤沢くふじさはなる、淨阿くじやうあ上人は、諸國遊行くしよこくゆぎやうなし給ふ、折くおりから、三河くみかはの、國くくににありときく

小栗くをくりがことをおぼしめし、住家くすみかへ、従者くしうしやをつかわしたまひ御、尋くたづねありけるに、小栗くをぐりはかゝる

難病くなんびやうにて、人のわかちもあらざれば上人は、驚くをとろき給ひ、自くみづから御、立くたちよりありて、涙くなみだ

にくれ給ひかゝる、壮年くさうねんの、勇士くゆうし、すくせいかなる、業因くかうゐんにてこの、悪病くあくびやうをうけぬるよ

と、御衣くみころもの、袖くそでをしぼらせ給ひ、難病平愈くなんびやうへいゆの御、加持くかぢありけるにその、夜くよ上人の、旅宿くりよしゆく

に、帰くかへらせ給ひまくらにつきし、暁くあかつきごろ、熊野権現くくまのごんげんの、霊夢くれいむを、蒙くかふむり給ひしかば、次くつきの、日くひ

里人くさとびとをうち、會くつどへしか／＼の事御たのみありて、数日くすじつ、止くどゞまるべき御、修行くしゆぎやうならねば

.北國〈ほつこく〉のかたへとて.御出立〈ごしゅつたつ〉ありける.里人等〈さとびとら〉は.道德〈どうとく〉ふ
かき上人の御たのみなりければ

[28右]

さつそくに一ツら

.車〈くるま〉をしつら

ひつゝこれに

.俄鬼宿〈がきやみ〉の

.小栗〈をぐり〉を

のせうしろに

.札〈ふだ〉を.立〈たて〉

つゝも

.筆太〈ふてぶと〉に

しるし

けるは

.此病人〈このひやうにん〉

[28左上]

.熊野〈くまの〉.権〈こん〉けんの.霊夢〈れいむ〉によつて

.紀伊〈きい〉の.國〈くに〉.本宮〈ほんぐう〉の.温泉〈おんせん〉へつかはす

なり.此車〈このくるま〉を一里にても.一町〈いつてう〉にても

一足なりともひくものは.現世〈げんせ〉

にては.祈祷〈きとう〉と

なり.諸願成就〈しよぐわんじやうじゆ〉

うたがひなし.来世〈らいせ〉は

かならず.仏果〈ぶつくは〉をゑて

うへなき.功德〈くどく〉とかき

つけて.街道〈かいどう〉へひきいだせば

.遊行〈ゆぎやう〉上人のおほせとき

われも／＼と.曳程〈ひくほど〉に.三河〈みかは〉の.國〈くに〉を

[28左中]

.跡〈あと〉となし

.美濃〈みの〉の.國府〈こくぶ〉に.着〈つき〉にけり

○ こゝに.横山〈よこやま〉が.養〈やしな〉ひ

.娘〈むすめ〉なる.照手姫〈てるてひめ〉は.酒〈しゆ〉

.宴〈ゑん〉の.座〈ざ〉にて

[28左下]

.親兄くをやあにくが
.毒酒くどくしゆくのたくみ
を.余所くよそくながら
.夫くつまくの小栗くをぐりくに
もらせしかばいか
なる.父くちくくくくく
にやあわんかとして
.我身くわがみくおなじく
小栗とともに

[29右]

.毒酒くどくしゆくにあたりたる.体くていくなし.息くいきくをこらしてふし.居くゐくたるを.横山父子くよこや
まふしくはまこと.思くおもひ
けん.菰くこもにくるみて.家来くけらいくにいつけその.俣くまうく.海くうみくへ.捨くすてくたりける ○ .相
模くさがみくと.武蔵くむさしくの.國くくにくつ
づきなる.金沢浦くかなざはうらくにすなとりをもて.世くよくをおくる.呂八くろはちくといへる.者くものくあり
ける.元来くぐわんらい
.愚直くぐちよくの.本性くほんしやうくにて.木納くぼくとつくの.仁くじんくありて.慈悲深くじひふかきもの
なるが.妻くつまくのお.苦くとまは.夫くおつくととは
うらそへにて.露くつゆくばかりもあわれを.知くしらず.常くつねくに夫が.心くこころくよきを.見くみくくだし
.萬事く己くばんじおのくが.俣くまうくにして.口くくちくさがなくい.匄匄くくのしりくめしつかひの.如くことく
もてなしける
ある.時くときく.呂八くろはちくは.夜網くよあみくに出くいでくんとしたくなしつ.六ツ浦くむつうらくの.濱
くはまより.獵舟くりやうせんくを.出くいだし
.簀くかがりくを.焚くたき.海上半道くかいしやうはんみちくも.漕くこぎくゆきたる.時分くじぶんくはよしと.
一網くひとあみくいるくに.手くてくこたへ
せしかば.得くえくものありと.曳くひきくよするにいと.重くおもくげなればちからをきわめひき
あぐるにこはそもいかに魚ならで.菰くこもにくるみし女の死骸なればあないまはし
と.気味くきみくわろげに.再くふたくくび.海くうみくへ.流くながくさんとせしにこの.死骸くしがいくは.別人
くべつじんくにあらず.横くよこ
.山くやまくがためにしづめられたる.照手くてるてなりこの.時くときく.姫くひめくは.定業くじやうがうくの
つきざるにや

[29左]

または.平常くへいぜいく.肌くはだくにつけたる.江くゑくの.島くま.弁才天くべんさいてんくの.應護くおう
ごくにやたちまち.生くいきくをふ

きかへし.手足<てあし>もがきうごめくにぞ.呂八<ろはち>はおどろき.逃<にげ>んとせしかど.海原<うなはら>と
い.船中<せんちう>なれば.艫<とも>のかたにうちふるへて.神明佛陀<しんめいぶつた>の.御名<みな>
をねんじいき
たる.心地<こち>はなかりけり.照手姫<てるてひめ>はしばらくあつてやうやくに.我<われ>にかへり.心
<こころ>
づきつ.眼<まなこ>をひらきあたりを.見<み>るに.月<つき>は.雲間<くもま>をわけいでゝあきらかに
.照<てら>しわたりその.身<み>は.真菰<まこも>につままれて.惣身<そうしん>.水<みつ>に.濡<ぬれ>し
よばれあやしき
.舟中<せんちう>にありければ.扱<さて>は.父<ち>と.兄<あに>かためにしづめにかけれかく.洋<わた
つみ>に.捨<すて>られ
て.死<し>たるに.相違<さうい>はあらねどかる.船中<せんちう>にありけるは.噂<うわ>にきし.黄泉
<くわうせん>の
.三途<さんつ>の.川<かは>まで.来<きた>りつ.弘誓<ぐせい>の.舟<ふね>にのりたるかと.半信半疑
<はんしんはんぎ>なをあたりを
よくみるに.一人<ひとり>の.男<を>の.子<こ>.艫<とも>のかたに.打<うち>ふるへおそれしさまにて.臥居
<ふしゐ>たれは
はしめて.此世<このよ>へ.蘇生<よみかへり>しをさとりつ.声<こゑ>枯<かれ>／＼と.呂八<ろはち>
にらちむかひのう／＼そ
こなる.船人<ふなひと>よ.自<みづから>はさのみ.怪<あや>しき.者<もの>ならずこはいづくかしらねど
もわらはこそ

[30 右]

.相模<さがみ>の.國<くに>の.何<なに>かしか.養女<ようぢよ>なるが.父兄<ちゝあに>にうとまれてから
はしづめにかけれしを
はからずもその.網<あみ>にかゝりてまたも.此世<このよ>へもどりしとおぼへたり.情<なさけ>あらは.此
<この>いましめ
をときほどきすくひてたべといひけるにぞ.艫<とも>のかたへにうち.臥<ふし>たる.呂八<ろはち>は.姫<ひ
め>が.言葉<ことば>を
きいてやうやくに.心<こころ>.落付<おちつき>.扱<さて>はそふかと.胸撫<むねなで>おろし.焚<たき>の
こりたる.篝<かざり>をもへさし
.姫<ひめ>のほとりへ.立<たち>よりて.菰<こも>ひきほときいましめの.縄<なわ>を.手<て>ばやにとき.捨
<すて>てなを
.篝火<かざりび>に.荒朶<そだ>うちくべ.冷<さめ>たる.衣<きぬ>の.水<みつ>をしぼりなどしてかわかし
さま／＼に.介抱<かいほう>な
す.人<ひと>の.情<なさけ>のたのもしく.姫<ひめ>は.前後<ぜんご>をかへり.見<み>て.不思議<ふし
き>に.蘇生<そせい>なしたる.身<み>も.便<たよ>る

べき。知くしるべもなくこゝはいづくと。知くしるよしもなき。行末くゆくすへを。思くおもひまはしさめ／＼とこそ

なげきける。呂ハくろはちも。姫くひめ)の。心くこゝろ)を。推くすいし。脊くせ)をかきなでつゝなぐさめて御。姿くすがた)を。見くみ)まゐら

すにやんごとなき。方くかた)さまの。姫上くひめうへ)と。見くみ)まゐらせ候にいかなる。訳くわけ)にてかくまでの

。憂目くうきめ)を。見くみ)たまふ。事くこと)やらんさりながら。幸くさいわ)ひに。命くいのち)。目出くめで)たく。己くわ)か。網くあみ)にかゝり

給ひてつゝがなしやつがれ。金沢浦くかなさわうら)なる。獵くすなどり)をもて。世くよ)をわたる。賤くいやし)き者にて候が

[30 左]

あばらやなから。一樹くいつしゆ)の。影くかげ)。一先今宵くひとまづこよひ)はおん。入くいり)ありて。一夜くいちや)をあかさせ給へかしましたその

。上くうへ)に。夜くよ)も。明くあけ)なばよき。御思案くごしあん)もそふろうべしとまめ／＼しくいけるにぞ。姫くひめ)は。呂ハくろはち)が

。誠心くまごゝろ)をたのもしく。信くしん)じ。思くおも)ひともかくもよきにはからひたび給へとおほせければしかれはとて。艚くろ)をおしたて。漕くこぎ)つゝ。濱辺くはまべ)に。着くつき)しかば。船くふね)をもやひにつなぎおき。姫くひめ)を

いたわり。手くて)をひきつゝ。我家くわかや)をさしてかへり。来くき)つ。門くかど)ほど／＼と。打敲くうつた)け)ば。寝深くねぼけ)たる

。声應くこゑをう)といらへて。女房くによぼう)お。苦くとま)は。立くたち)いで。内くうち)よりも。鎖くかけがね)はづし。戸くと)をひきあくれば

あるしの。呂くろ)ハ。女房くによぼう)にうちむかひ。今宵くこよひ)はすこし。訳くわけ)あつて。珍客くちんきやく)を。同道くとう)／＼せし。程くほど)に

。爐くいろり)に。荒朶くそだ)をうちくべて。茶くちや)をわかしたら。膳夫くぜんぶ)の。仕くし)たくをこゝろへよといつければ

しぶ／＼と。又くまた)しても／＼。何くなん)ぞといふと。人くひと)をひき。込くこみ)。有余くありあま)る。身上くしんしやう)らしく。馳走くちそう)ぶ

も。久くひさ)しむものじやとふせう／＼に。焚附くたきつけ)の。心くこゝろ)は。煙くけむ)る。吹竹くふきだけ)に。火くひ)をふく。顔くかほ)はさな

がらに。潮くしほ)ふく。河豚くふぐ)のごとくなり。呂くろ)ハはこれにとりあわず。門辺くかとべ)にたちたる

。照手姫くてるてひめ)にうちむかひ。見くみ)ぐるしく候へども。心くこゝろ)おきなく。御入くをんいり)あつて。休くやす)ませ給へと

[31 右]

まねくにぞ。照くてる)手は。呂くろ)ハが。情くなさけ)にてこゝ

まてきたれども今女房のくり事を

.門口〈かどぐち〉に.聞〈き〉つゝも.氣〈き〉のとく
にやおほしけんためらひ
給ふをいざ／＼と手を
とり.上〈うへ〉へ.連〈つれ〉きたれば
お.苦〈とま〉は姫を見る
よりも.忽〈たちま〉ち
.愀氣〈りんき〉の
おもひを出し
茶釜の.下〈した〉.諸共〈もろとも〉に

[31 左]

.胸〈むね〉は.口〈□□〉たつばかりなれば
なをがや／＼とわめく
にぞ.呂八〈ろはち〉は.姫〈ひめ〉の.手〈て〉
.前〈まへ〉さへ.面目〈めんぼく〉を
うしなふて
お.苦〈とま〉をしかりすかし
つゝ.物〈もの〉かげへ
かち.招〈まね〉く
.今宵船中〈こよいせんちう〉
にてすくひ
.上〈あげ〉し.一部〈いちぶ〉
.始終〈しじう〉をかたり

[32右]

けるにぞすこしはわめきも.静〈しづ〉まりたれど.猶〈なほ〉うたがひは.晴〈はれ〉ざりけり.照手姫〈てるて
ひめ〉は
あるじの.妻〈つま〉が.飽〈あき〉まで.嫉妬〈しつと〉のおもゝちに.痛〈いた〉まぬ.腹〈はら〉を.探〈さぐら〉
るゝせつなさ.心〈こゝろ〉くるしさ
を.世〈よ〉に.憂事〈うきこと〉におもへども.夜〈よ〉ふけといひことには.女子一人〈をなこひとり〉にていか
なる.難〈なん〉に.逢〈あふ
ことありやと.案事〈あんじ〉わづらひころなすも.身〈み〉をかづめて.虎臥〈とらふす〉.野辺〈のべ〉のご
と
くなる.此夜〈このや〉に.宿〈やど〉りを.求〈もとめ〉けるかくて.姫〈ひめ〉は.次〈つぎ〉の.朝〈あさ〉とくお
きであるじ.呂八〈ろはち〉に
.再世〈さいせい〉の.恩〈おん〉を.謝〈しや〉し.武蔵〈むさし〉の.江戸〈ゑど〉にありといふ.乳母〈めのと〉
が.方〈かた〉へたづねんとて

.爰<こ>を.出<い>で.>んとなしたるをあるじの.呂八<ろはち>は.袖<そで>ひきとめ.若<わかき>.女子
<おなご>の.耆人<ひとり>
.旅<たひ>はきわめてあやうきことにて候さひわひに.我等<われら>も.明朝<あす>は.用事<ようじ>あり
て.大森辺<おもりへん>までまゐるなればまげて.今<いま>一と.夜<よ>あかさせたまへわれら
がそこまでおくりてまゐらん人の.難義<なんぎ>は.我身<わがみ>のうへ.慈悲<じひ>して
あしくは.報<むく>わぬものなり.一夜<ひとよ>なりとも.御宿<おんやど>もふすもすくせの.縁<ゑん>
て候べしと.情<なさけ>ふかきあるじが.言葉<ことば>にたよりなき.身<み>の.心<こゝろ>まよひて

[32 左]

.終<つい>にその目も.止<とどま>りけり.呂八<ろはち>は.今日<けふ>も.入相頃<いりあいころ>よりれい
のごとく.綱打<あみうち>
かつぎて.濱辺<はまへ>をさして出ゆくあとに.女房<にようば>お.苦<とま>は照手の身のうへ
夫よりしか／＼とき／＼しかど.邪智<じやち>ふかきさがなれば猶うたがひて
ありけるが.最<さい>ぜんおつとが.言葉<ことば>のはし.翌日<あす>はおくりてゆかんと
.約<やく>せしことを.心<こゝろ>にかけつ.扱<さて>は.夫<おつと>か.物<もの>がたりしかの.女<をん
な>のすしやう
だては.我手<わかて>前をはかりての.虚言<そらこと>にきわまりたり.推<すい>りやうに
さうみなく.隠妻<かくしつま>を.連来<つれき>たれどくあひあしさに.言<い>あわせて.欠<かけ>
.落<おち>の.下<した>こしらへをするものならんとあじな.所<ところ>へ.邪推<しやすい>をまはし
.嫉<あたき>ことかきりなく.夫<おつと>か.出<いて>ゆく.跡<あと>うちみやり.姫<ひめ>を.己<おのれ>
が.側<そば>へひきよせ
.眼<まなこ>をいからし.蜜婦<みつふ>であらんといたけだかに.問<とひ>たゞせど.身<み>におぼへ
なき事なれば.言<い>わけの.言葉<ことば>をつくせどさら／＼に.聞入<きいれ>なくおのれ
あくまでいつわるに.憎<にく>さもにくしと.立<たち>あがりて.口<もへ>さしたる.松薪<まつまき>

[33 右]

ふり.上<あげ>かよわき.姫<ひめ>のくろかみつかんでうちたゞき.情用捨<なさけようしや>もあら
なわもて.照手<てるて>をいたく／＼しあげ.棟<むなぎ>につるしその.上<うへ>に.松葉<まつば>をくべて
いぶしたつれば.煙<けむ>りは目口におせいりてしゆらのかしやくに事ならず
.姫<ひめ>はかなしさくるしさもたゆるばかりにおぼへつゝさまで.賤<いや>しき.悪女<あくぢよ>
が.為<ため>に無矢の難をきせられてかゝるうき.目<め>にあふことはすくせ
いかなる.因縁<いんゑん>ぞとなみだの.雨<あめ>にぬれ.衣<きぬ>もかわくよしなく.見<み>へ
にけりお.筈<とま>はなをもいぶしたて.照手<てるて>か.顔<かほ>をはつたとにらみ
コリヤ.女<あま>よおのれはいづくの.野狐<のきつね>でおらが.亭主<ていしゆ>を.化<ばか>しおつた
その.正<せう>躰をあらわして.実言<ほんね>をだすまで.此<この>よふに.松葉<まつば>いぶし
はをろかなこと.夫<をつと>の眉.毛<け>か.鼻<はな>の.毛<け>までのばしたことの.腹<はら>たゞ
しさおのれがひき.込<こむ>.古穴<ふるあな>のそこまでいち／＼ぬかさずは.化<ばけ>の

.皮<かわ>の.尻尾<しつぽ>を.出<だ>すまて.南蛮<なんばん>いぶしの.唐芥子<とうからし>からき.目
見<めみ>せん

[33 左]

とたち上り爐にありあふ焼火ばしにてなきいる姫が細腰の
股のあたりをはつたとうてば望の肌もたちまちにむらさき
色にはれあがり肉は破れて血汐の紅目もあてられぬ風情なり
○ こゝにお苦が舎兄にて眼蔵といふ悪漢あり猴彦道のかけ
ごとにふけり大酒をこのみて悪事にのみたづさわるものなるゝが
今宵も賭博してみなちまけ呂八が方へいたりて姉なるお筈を
すかしつゝ下むまにても借んものと爰に來たりて門口をひき
あけんとせしほどに内にて聞なれぬ女のなき声の聞ゆるもの
から何事なりやと戸の透よりしのび足にてさしのそけば婦な
るお筈がみめよき女を棟へつりあげ松葉にていぶしつゝ手痛
せつかんなす有さま合点ゆかずとおもへどもさいわひに呂八は
留守なりいりて様子をきかばやと門ぐちおしあけ内にいれは

[34 上段]

お苦は人のいりきたる
にうち
おど
ろき
つゝ
飛の
けば眼
蔵はどつ
かとざし
姉子よ
さのみおどき
たまふな
.眼<がん>
.蔵<ざう>か
.来<き>たりし
なり
どふした
わけで
.此女子<をなこ>を
.手<て>

[34 下段]

ひどくせつ
かんしたまふ
ぞと問れて
お苦は弟にむかひ
眼蔵よきゐて
くれ此女子めはつら
にも似ず
.呂ハ<ろはち>どのゝ
おこゝろよしを
たらしこみ.虚<うそ>
.八百<はひやく>でことをこしらへ
.手<て>まへもはゞからず

[35 右]

.鉄面皮<あつかましく>もうちへおしこみあけくの.果<はて>に.宿六<やどろく>のぼんたとのゝと.欠<か
け>□□
.相談<さうだん>なんぼ.気<き>のよひわしじやとて.腹<はら>が立ずにいらりやうかと
.畳<たたみ>たゝいてわめくにぞ.眼蔵<かんざう>はこれをきゝつ.持<もち>まへの.胸算<むなさん>より
.姉<あね>をかたへにうち.招<まね>きしばらくさゝやき.諭<さとす>にぞお.筈<とま>はたちま
ち.完尔<にこ／＼>とおもての方へ出て.行<ゆく>.眼蔵<がんざう>はたちあがり.照手<てるて>が.縄<な
わ>を
うちほどきさま／＼と.介抱<かいほう>するにぞ.姫<ひめ>は.苦痛<くつう>にたへかねて
.始終<しじう>うつでありけるがやうやくに.心<こゝろ>づき今.得<え>も.知<し>らぬその
人にかく.介抱<かいほう>にあづかりて.正気<せうき>はつけど.此上<このうへ>にまたもやうき.目<め>
を.見<み>んものと.守<まも>り.本尊<ほんぞん>をねんじつゝさしうつむいておわし
ける.眼蔵<がんざう>は.猶<なを>いたわりつ.猫<ねこ>なで.声<こゑ>コレ／＼.女中<ぢようちう>.気
<き>はたしかに
なられしかさぞかしくるしかつたであらふ.此家<このや>の.妻<つま>はわが.姉<あね>
なれどもこゝろ.狭<せま>き.本性<ほんしやう>にて.実否<じつふ>もたゞさず.客人<きやくじん>のこなた

[35左]

を.手<て>ひどくせつかんしたは.女<おんな>の.愚知<ぐち>なこゝろから.現在<げんざい>の.弟<をと>
が
.来<き>てやうすを.聞<きい>てやうやくに.納<なつ>とくさせ.用<よう>をたのんで.隣<となり>むら
までいなした.程<ほど>に.佛<ほとけ>のやうなわしが.来<き>ては.大<おほ>ぶねにのつた.気<き>で
かならず.気<き>づかひしたまふなしたが.山家<やまが>になが.居<ゐ>をしては

こなさんのためにならぬわしが、家〈いへ〉まで、同道〈どう／＼〉して、夫〈それ〉からさき、兎〈と〉も、角〈かく〉もしるべの、方〈かた〉へをもむきたまふも、心〈こころ〉のまゝ、寸善尺摩〈すんぜんしやくま〉と、世〈よ〉の

たとへ、何〈なに〉はともあれこの、家〈や〉とはふかひ、縁〈ゑん〉ありわしがとこまでゆきたまへ、早〈はや〉く／＼とせきたてられ、姫〈ひめ〉は、何所〈いづく〉とよるべなきさすらへ、人〈ひと〉の、身〈み〉にしあれば、人〈ひと〉の、言葉〈ことば〉のたのもしく、其善悪〈そのせんあく〉はわからねど

またもや、此家〈このや〉の、女房〈にようぼう〉が、立〈たち〉かへりなばいかゞあらんと、虎口〈こう〉をのがるゝ、心地〈こち〉して、眼蔵〈がんぞう〉にうちむかひわらはゝ、常陸〈ひたち〉の、者〈もの〉にてはべるがすく世の、業〈がう〉か、父母〈ちちはは〉にはやくおくれやしなひ、親〈をや〉にうと

[36 右]

まれて、日々〈ひび〉のせめ、苦〈く〉のたへがたく、家〈いへ〉をぬけいでいづことも、定〈さだめ〉かねたる、旅〈たび〉のそらとてもこの、世〈よ〉にうき、年〈とし〉をおくるも其のかくわだつみの、浪間〈なみま〉へ、身〈み〉をばなげたるおり、呂八〈ろはち〉どのとやらんに、命〈いのち〉を、救〈すく〉われ一と、夜〈よ〉のやどりにあづかりしを、妻〈つま〉なる、人〈ひと〉にうたがわれしとなみだながらに、語〈かた〉るにぞ、眼蔵〈がんぞう〉はしたり、貞〈かほ〉さもあらん／＼、人〈ひと〉の、難義〈なんぎ〉を、余所〈よそ〉に、見〈み〉ぬ、佛〈ほとけ〉ごゝろのとしじやもの、欲徳〈よくとく〉はなれ

て、世話〈せわ〉するほどにわしが、所〈ところ〉まで、来〈き〉た、上〈うへ〉でまたよきしあんは、膝〈ひざ〉とも、談合〈だんかう〉したが、夜中〈よなか〉に、女〈をんな〉をつれてのそ／＼ゆくもはゞかりありこなたは、身軀〈みうち〉のいたむと、見〈み〉へるさひわひ、爰〈こゝ〉に、大魚籠〈おおふご〉のあけてあるはさいわひなり、窮屈〈きうくつ〉なりともこの、中〈うち〉へ、入〈いり〉たまひかしわしが、負〈お〉ふてゆくほどに、夜〈よ〉あけぬ、内〈うち〉にいそがんと、魚籠〈ふご〉をあけてすへおくにそたばかりるゝとは、夢〈ゆめ〉さらしらず、眼蔵〈がんぞう〉かいふに

[37 左]

まかせて籠の中へと身を忍ばせしたり顔にうち笑つゝこれを背負て門おしあけ表のかたへ出てゆくこは眼蔵が来たる折から宮前の様子をうかがひ内に入て姉お咎に蜜談なし姫をいたわり情ある言葉のはしを聞しらせあざむきすかして連行つゝ人買に買わたし大金を得んもくろみゆへかくまで事をこしらへたり○ 扱も眼蔵は魚籠の中に姫をしのばせ我家へはつれもゆかず小船にうち乗六浦沖なる人買舟に連ゆきて三十金にぞうりわたしつゝその夜は姉のかたへ帰すこしの黄金をお咎にあたへそしらぬ顔にて立わかぬ賭の場所へぞはせゆきけりお咎は呂八があげの朝夜網よりもどりしかは照手は夕辺丑みつすぎに欠おちして行がたは寝いりばなゆへしらざりしとこたへけるこは後末の物語

なりそれは扱をき照手姫は眼蔵にあざむかれ今は人買の手

[37 上段]

にわたり
つゝいづくの
浦へ買わたされ
この上のはづかしめに
逢ふことありなば
先ごろ海原にて
ひとおもひに死
たるがまし
ならめ神
ほとけにも
見はなされ
此世に

[37 下段]

晴るころ
なしよしさらば
ひまをうか
がひ身を
なげんと
心には
おもへど
も番を
つけつゝ
昼夜ま
もれば死
するにも死せ
ざれぬ業因
ぞと只なき
あかして
居たりけり
人買の船長

[38 右]

.是<ぜ>源治はこの沖に.碇<いかり>をおろし数日滞船して諸方よりあまた
の美女を買とりつゝ日を経て船に帆をかげゝ.上<かみ>方へみよしを

むけ所々の遊里へたちよりてあまたの女子を買わたすその内
に照手ひとりはあまたの女の中にてひとときわ目だつ客色
美しい。瓦礫〈くわれき〉にまじゆる夜光の名。玉濁〈きよくに〉にそまぬ。泥〈でい〉中の。蓮〈はちす〉と
是

源次ころにおもひ大切にいたわりつゝ美濃の國府にはせゆきつゝ
万屋長右衛門がかたに連ゆきて身の。價〈しろ〉。若干〈そこばく〉に買わたしぬ此
万屋といへるは旅人をとめる旅籠やなれば照手がみめよき姿
を見て大金にて買とりつゝ。傀儡女〈くつゝめ〉にぞ抱へけりあるじ長
右衛門は照手をちかづけその出性を問たゞせど姫はまことを
をし隠して。常陸〈ひたち〉の生れといつわりて名は小萩とぞこたへける
長右衛門は照手にむかひそちがからだはわれらが方にて大金を

[38 左]

もてあがなひたれば是よりこゝにとゞまりて。客人〈まろうど〉たちの
夜るの伽なにくれとなく気げんをとりてまめやかにつとめよと
ねんごろにいわたせば。姫は両手を畳へつかへあるじの君のおふせで
はべれどわらはゝ神に。誓〈ちかひ〉をたて男に肌はふれまじと。大願〈だいぐわん〉をかけ
候得ばこの義ばかりはゆるさせ給へその余のかしき水仕のわざは
いかなることにて候ともいなどとはもふし候わじと思ひきつて言
放せば長右衛門は案に。相違〈さうい〉しなをかやかくといひさとせど照
手の小萩はきゝいれずなにぶんこの義はゆるさせたまへ御主人
のおゝせをばまげてそむくにあらざれどもわが身悪ものにたば
かられ人。買〈かい〉の手にわたりこなたへ。買〈うら〉れ来りしなればはじめ
よりしてかふいう業にならんとは夢さらにおぼへ候わじさは
あれど主となりしあなたのおゝせつれなくもそむきまゐらす

[39 上段]

ことその
罪深く
候へども
神の
ちかひは
もつ
たいなしおん
。惜〈あた〉しみのあるなれば。命〈いのち〉を
とりて御いかりをはらさせ
たまへと。覚語〈かくご〉の。言葉〈ことば〉に
。長〈ちやう〉右衛門はあぐみ

はてかくまで
におもひ
つめしを
.無理〈むり〉に
つとめを
させんも

[39 下段]

ほひなしゆる／＼と.解〈とき〉さとして
そのうちに.兎〈と〉も.角〈かく〉もせんが
さりとして.外〈ほか〉の.女子〈をなご〉どもへ
しめしも
あれば.小萩〈こはぎ〉
をけふより
.水仕女〈みづしめ〉となし
七人まへの
はたらきを
いひつくるに
.小萩〈こはぎ〉はこれを

[40 右]

かしこみつゝ.朝〈あさ〉はつとにおき.夜〈よ〉は.五更〈こかう〉のころまでも.店〈みせ〉さき.勝手〈かつて〉
を.打〈うち〉
はたらき七人.前〈まへ〉のかしぎの.業内外〈わざうちと〉のはたらきのこりなくまめ／＼
しく.勤〈つとめ〉けるにぞ.長〈ちやう〉右衛門もこのはたらきをうち見つゝ.小萩〈こはぎ〉が.心〈こころ〉を
.推〈すい〉しつゝその.貞操〈ていさう〉をふかくあわれみ.其俣〈そのまゝ〉に.捨置〈すておき〉けり

第四回

さても.小栗助重〈をぐりすけしげ〉は.俄鬼病〈がきやみ〉となり.果〈はて〉つゝ.面〈おもて〉もくづれ.肉〈にく〉に
くおちて
.骨〈ほね〉もあらわに人のわかちもなくこれを.里人等〈さとびとら〉うちよりて.遊行〈ゆきやう〉上人
のおせもあればかたのごとく.車〈くるま〉にうちのせ.熊野山〈くまのさん〉へとおもむかしむる
.道〈みち〉すがら心ざしあるものはゆきながらに.是〈これ〉をひくにぞ.日〈ひ〉を.経〈へ〉て
.美濃〈みの〉の.國府〈こくふ〉まで.来〈きた〉りしところけふしも小萩はよろづやが.門口〈かどぐち〉
にて.旅人〈たびびと〉のとまりをひきて.有〈あり〉けるがおりしもあまたの.人音〈ひとおと〉して
.売人〈ひとり〉の.俄鬼病〈がきやみ〉を.車〈くるま〉にのせ.同者老若〈どうしやらうにやく〉どよめきて車
のつなを

[40 左]

ひき.来<き>たれば.何<なに>ことやらんと立よりて彼.俄鬼<かき>病が車にかけたる
.立札<たてふた>をながめついそがわしく.主人<あるし>長右衛門が前にいてつかふすやう
わらはゝ.幼稚<おさなく>して父母にわかれ養ひ.親<おや>にうとまれてかくなり果し
うへからはまことの父母の.忌日<きにち>にさへ.春花<はるばな>をたむけ.得<え>ずとしごろ
不幸にうちすぎし.父母<ち>はゝの.菩提<ほとひ>のため.尊<たふと>き.聖人<ひしり>のおゝせごとある
俄.鬼<き>やみの.車<くるま>をひくなれば.我身<わかみ>の業もめつするかとふかくの.車<くるま>を
ひきたしとさま／＼とねがひけるにそ長右衛門もなさけある者なれ
ば.日<ひ>ころ.小萩<こはき>がまめ／＼しく七人.前<まへ>の.水仕<みつし>をつとむるそのさまの
かひ／＼しくかつ.才<さひ>たけたる.女子<をなこ>なるを.見<み>てありければさつそくに
.納得<なつとく>して.上下<かみも>三日のいとまをそつかはしける.小萩<こはき>は大ひによろこび
つゝ俄鬼やみその.車<くるま>をひくにその.様<さま>の異なれば夫とさだまる.助重<すけしけ>を
.神<かみ>ならぬ身の.露<つゆ>しらず生死もしれぬ夫のため一ツには父はゝの

[41 右]

菩提のためなりとて昼ばかりにてははかとらす夜をかけて三日そ
ひきたりしは気持なりけることともなり
○ さても小栗の俄鬼病は往来の人のなさけにて日かずを経て
やうやくに.紀昶<きしう>なる.熊野本宮<くまのほんくう>の.温泉<をんせん>に.着<つき>けるがおほくの.
同者<どうしや>は
.俄鬼<かき>やみを.車<くるま>よりひきおろし.湯坪<ゆつぽ>のうちへいれつゝもみな／＼
下.山<さん>なしにけり.助重<すけしけ>の俄.鬼<き>やみは湯つほのうちにありけるかまこと
や黄泉よりわきいづる霊湯なれば七日木浴するうちに目耳.鼻<はな>
あざらかになり.二七日<ふたなのか>には髪もはへつゝ身軀うとき人こゝろつき
三七日には肉つきてちからも.元<もと>のことくなりければ小栗はふくらひ
我にかへりよろこびなゝめならず是ひとへに湯谷権現の利益
なりと信心きもにめいしかつは藤澤なる遊行上人の道德をぞ
かんしけるかくて十人の郎黨は主なる小栗か病気のよし風の

[41 左]

.便<たよ>りに.聞<き>つゝも.追<をい>／＼に.熊野<くまの>へたづねきたりしが.助重<すけしけ>が.
本<ほん>ぶくの
ていを.見<み>てよろこぶこと.大<お>かたならず.中<なか>にも.鎌<かま>くらよりもどりたる.水戸<み
と>
の小太郎と.京都<きやうと>に.居<ゐ>たる.池庄司<いけのしやうじ>かもふしけるは.鎌倉<かまくら>ど
の.小<を>ぐり
.一族<いちぞく>が.罪<つみ>なくして.滅亡<めつぼう>せしを.後悔<くわうくはひ>し給ひ.助重<すけし
げ>こそうち.死<じ>にせず

して、世くよをしのぶよし、何卒くなにとぞたづねいだしてめしかへすべしと、内蜜くないみつ
おいせ、出くいだされしところ、風聞くふうぶんには、先達くさきだつて、藤沢寺くふぢさわでらにて、火葬
くくわさうなしたる
ときゝたまひ御なげきありとうけたまわりゆといひけるにそ、人々くひと／＼は
、勇くいさみたちさらば、是くこれより、鎌くかまくらにくたりつゝ、父くちゝの、仇くあたたる、一色くいつ
しきをうち
ほろぼしその、上くうへ、横山くよこやまをも、征罰くせいはいつして、鎌倉くかまくらどのゝ御、勘気くかん
きごめんを、願くねかはん
と、主従くしゅう／＼つれだち十一、騎くき東海道くとうかいどうを、下くくだりしが、美濃國くみのゝく
にくなる、國府くこくぶの、郷くかうに
、當着くとうちやくしてその、夜くよはよろつ、屋くや、長くちやう右衛門のかたを、本陳くほんちんとして
こゝに、宿くやど
りをもとめける ○ かくて、照手くてるてひめなる、常陸くひたち、小萩くこはぎは、主くしゅうに忌日の
いと

[42 右]

、間くまをたまわり、俄鬼病車くがきやみくるまを
、願くねがひのことく
ひきつゝも
、足くあしばやに
、國府くこくぶに
、立くたちもどり
、長くちやう右衛門
にふ
かく
し
やしれいのごとく、家くいへの、内くうちを
、立くたちはたらきてありけるが

[42 左]

、今宵くこよひはこゝを、本陳くほんちんとして、入くいり
、来くくる十一、騎くきのものゝふこそすぎし
、歳くとしわかれたる、夫くおつとの、助重くすけしげにほうほつたれは
かく、迄くまで
、似くにたる
、人くひとの
あるべくとも
おぼ

へず
これぞ
わが、夫〈つれ〉にて
おわさんかゆきて、名〈な〉のり、見〈み〉んものぞと

[43 右]

へだてのふすまをさしのぞきこゝろまどひて、忙然〈ほうぜん〉たり、小栗助重〈をくりすけしげ〉
は小二郎、兼氏〈かねうじ〉と、変名〈へんみやう〉なし、長〈ちやう〉右衛門がかたを、本陳〈ほんちん〉とし、
奥〈おく〉なる、一間〈ひとま〉に
・居〈ゐ〉なをりて、十騎〈しつき〉の、郎黨〈らうどう〉にうちむかひ、是〈これ〉、横山親子〈よこやまおやこ〉の
ために、毒酒〈どくしゆ〉
の、壺〈つぼ〉をうちつけられ、毒氣〈どくき〉にあたり、身軀〈しんたい〉くづれ、終〈つい〉に、俄鬼〈かきやみ〉と
なりたるを、藤沢〈ふぢさわ〉の上人がおゝせにておほくの、同者〈どうしや〉らなさけにひかれ
・熊野本宮〈くまのほんぐう〉の、温泉〈おんせん〉にいりて、本腹〈ほんふく〉のけふにいたれりしかるに、下
山〈げさん〉
の、道〈みち〉にて、里人等〈さとびとら〉がはなすをきくに、美濃〈みの〉の、國府〈こくぶ〉の、驛〈ゑき〉より
も、年〈とし〉
いとわかき、一人〈ひとり〉の、女子〈をなご〉がわが、俄鬼病〈かきやみ〉の、小車昼夜〈くるまをちうや〉三
日ひきたりしと
き、およべりいかなる、者〈もの〉かその、女子〈おなご〉にひとたびあふて、再世〈さいせい〉の、礼〈れい〉を
しや
せんとおもふなり、此家〈このや〉のあるじにいつけてこの、國府〈こくぶ〉の、郷〈がう〉をたづね
たらんに、知〈し〉れざることはあるべからず、池〈いけ〉の、庄司〈しょうじ〉とて、長〈ちやう〉右衛門にこの、
義〈ぎ〉
をゆだねはや／＼、取〈とり〉はからひてよとかいせければ、庄司〈しょうじ〉かしこみて、主〈あるじ〉に

[43 左]

長右衛門をよびよせつ、主〈しゆう〉のおゝせをしか／＼といいつくるにそ長右衛門
はかのすぎつる日、俄鬼病〈かきやみ〉の車にのりて門辺をすぎしは此殿にてをく
せしかさらばその車を三日三夜ひきたるをなごはすなはちわれらが
・召仕〈めしつかへ〉の常陸の小萩といへる、者〈もの〉只今勝手をうちはたらきあり候へは
早速に仕たくをしかへ、殿〈との〉の現参にいれたてまつらんとほかりがに勝手
にいたり小萩をよびてしか／＼といいつくるにぞ殿の、御前〈をんまへ〉は、出〈いづ〉るばかり
で候へば、兎〈と〉も角もなしはべらんが御鎌倉の御、伽〈とぎ〉などはおもひもよらず
候といひけるにぞ長右衛門は小声になりかの殿こそすぎつる日の
・俄鬼病〈かきやみ〉にてそちに、車〈くるま〉をひかせたるその、礼〈れい〉をいわんとてもし
たよりなるになんでうみだりがましきことであらんとく／＼

仕たくなしたまへといそがしたつれば、照手〈てるて〉の小、萩〈はぎ〉は、吾夫〈わがつま〉の面影にすぶんちがわぬあの、殿〈との〉ぶりそれかあらぬかいぶかしと主人

[44 上段]

のおほせに、余義〈よぎ〉
なくも仕たくしかへて、兼氏〈かねうじ〉の
、御前〈ごぜん〉に、出〈いで〉つゝもはるかにさがり
、両手〈りやうて〉をつかへさしうつ
むひて、居〈ゐ〉たりけり
、小栗〈をぐり〉ははるか
にこれを

[44 下段]

、見〈み〉るにこは
、什麼〈そも〉いかに、小萩〈こはぎ〉
といへるは夜へて
、久〈ひさ〉しき、吾妻〈わがつま〉の、照手〈てるて〉
、姫〈ひめ〉にてありければ十人の
、郎黨〈らうどふ〉もろともにあきれて
、言葉〈ことば〉は
なかりけり

[45 右]

○、小栗〈をぐり〉は、小萩〈こはぎ〉をそば、近〈ちか〉くよびちかづけそのほうはさがみにありし、照手〈てるて〉にてはあらざりしかわれは、小栗助重〈をぐりすけしげ〉なりと
、名〈な〉のりたまへば、照手〈てるて〉の、小萩〈こはぎ〉は、助重〈すけしげ〉にとりすがりわらはも
さいぜんより、君〈きみ〉にはさうゐあらしものところにおもひ候
へどもかくなり、果〈はて〉し、面影風俗〈をまかげふうぞく〉、君〈きみ〉は、見〈み〉わすれたまひしかと
さすがに、外〈くわい〉ぶんをはゞかりはべりて、言葉〈ことば〉もいだしまゐ
らせずあな御なつかしの、我君〈わがきみ〉やとさきだつ、泪〈なみだ〉せきあへず
たかひにしばらく、言葉〈ことば〉なく十人の、郎黨〈らうどう〉とも／＼に
、照手〈てるて〉がかんくのありさまに、勇猛〈たけき〉ころもおのづから
、余情〈よじやう〉のなみだをもよふしけりしばらくあつて、助重〈すけしげ〉
、照手〈てるて〉にわかれ、三河〈みかわ〉にきたりて、毒氣〈どくき〉にあたりて、俄鬼〈がき〉
やみとなりはて、遊行〈ゆぎやう〉上人のおゝせにて、熊野〈くまの〉にいたり

[45左]

本宮の温泉にて難びやう平愈したりしかばこれより

鎌くらにいたりつゝ仇をほろぼし家名.再興〈さいこう〉せんとして
の下向なるよし.始終〈しじゅう〉しか／＼とありしことども物がたれ
ば照手も小栗にわかれてより.毒〈どく〉酒にあたり.死〈し〉たる.体〈てい〉
にて.臥〈ふし〉居たるを養父横山がはからひにて.菰〈こも〉にくるみて
海にすてられ金津浦にて.鱧師呂ハくれうしろはちが網にかゝりて
すくひとられそれよりかれが妻お筈がために無矢の難を
きせられてうき目にあひしをその弟眼はこれをたす
くる.面〈おも〉もちにてその場を連のき人.買〈かい〉の.是源治〈ぜげんじ〉といへる者
に.買〈うり〉わたされこの.地〈ち〉へ流れきたりつゝあるじ長右衛門がひき
とりて.傀儡女〈くぐつめ〉になさんといひしを二夫にまみゆる事ばし
もおもひよらねば七人の水.仕〈し〉をつとめて今までも.賤〈いや〉しき

[46 右]

わざはいたせしかど女の.操〈みさを〉はやぶらじとこれまでのかんなん
しんくを残るかたなく物がたれば小栗は照手のまごゝろ
とその.貞操〈ていさう〉をかんじつゝかつはあるじ長右衛門が大金をもて
あがなひしを.姫〈ひめ〉がこゝろを見きわめて傀儡のつとめを
させざりしその男気をねきらひてこれに.若干〈そくばく〉の.黄〈こ〉金
をあたへ鎌倉に下向なし.仇〈あだ〉をほろぼし家名をおこ
さば.速〈そく〉日に照手姫をむかひに来るしべそれまでは長右衛門
にあづくるなればいたわりかしづきまゐらせふと十人
郎黨にいわたせ.翌〈よく〉日照手にわかれをつけ.美濃〈みの〉の
國府を立いでつゝ鎌くらさしていそぎけり

第五回 大尾

[46 左]

.爰〈ここ〉にまた.一色式部少輔詮秀〈いつしきしきぶせうやうあきひで〉は.上杉安房守憲實〈うへすぎあ
わのかみのりさね〉の.忠〈ちゅう〉
.賢〈けん〉なるをふかくそねみしたすら.罪〈つみ〉におとさんとはかり
けるを.智慮〈ちりよ〉の.上〈うへ〉すきはやくもさつしつゝ.一色〈いつしき〉が.悪事〈あくじ〉
の.始終持氏公〈しじゅうもちうじかう〉に.纔〈ざん〉をかまへ小.栗〈ぐり〉一ぞくを.滅〈めつ〉ぼうさせし
ことなどいち／＼に.京都將軍家〈きやうとしやうぐんけ〉へいひをくりければ京都
よりもその.虚実〈きよじつ〉ふうぶんをたゞさんとして.隠〈をん〉みつに
.探索〈たんさく〉ありけるほどに一色が悪事のだん／＼.分明〈ふんめい〉なれば
.鎌〈かま〉くらにもふしくだして.糺明〈きうめい〉あるべしと.聞〈きこ〉へしかば.己〈おの〉が
.屋〈や〉しきにもたまり.得〈え〉ず.夜中〈やちゅう〉しそかにたちのきて.横〈よこ〉
やまかかたにふかくしのびてぞ.居〈ゐ〉たりけり小ぐり.助〈すけ〉

.重くしげは.美濃路くみのちよりかまくらに.来くきたり一色横やまを
つけねらひてありけるがこの.事くことをしそかに.聞ききいだし

[47 右挿絵]

[47 左]

.小栗くをくり
.長くちやうかもとに
やとりて
.小萩くこはきに
.再會くさひかいす

[48 右]

.天くてんのあたへと.諸方くしよはうより.出来くいでくる.譜代くふだいの.郎黨くらうどうをあつめか
たらひ.十騎くじつき.の.勇士くゆうし
.先くさきだちてその.勢くせい百五十.騎くきに.横山くよこやまが.館くたちへと.夜打くようちをぞ
かけたりけり.横山父子くよこやまふしは
.俄くになかのことにて大ひに.驚くおどろきははじめは.防戦くふせぎたかひけれども.小栗くをぐりを
はじめ.池片岡風間くいけかたおかかざま
.後藤くごとうの.勇士等くゆうしらにきりたてられて.一族余類くいちぞくよるいうしろのかたより.落くお
ちう
せけり.後藤くごとう大八.田辺平八くたなべへいはちにげるものには.目くめもかけず.横山くよこやま
三郎.安武くやすたけ
をいけどりけり.片岡兄弟くかたおかきやうだい.は大膳安秀くだいせんやすひでをいけどりけり太郎.安
次くやすつぐ
二郎.安春くやすはるはちつともおくれず.小栗勢くをぐりぜいの.中くなかへわつて.入くいりやにわに
.三騎くさんききつてをとし五人に.手くてををわせ太郎はその.身くみも.手くてををひ
ければこれまでなりと.二人くふたりの.兵くへいを.下くしたにしきその.上くうへにて.腹くはらかき.
切くきつて
うせにけり二郎は.兄くあにの.打死くうちじに.を見くみるよりも.花くはな／＼しき.働くはたらきして
つづみて.腹くはらきりうせ
にけり四郎.安高くやすたか五郎.安長くやすながは.風間くかざま兄弟にうたれければ.一色詮秀くい
つしきあきひで
も.今くいまはかなわぬところなりと.雑兵くぞうひやうの.姿くすがたにやつしからめての.小門くこも
んより

[48 左]

.逃<にげ>いづるを.助重<すけしげ>はるかにこれを見<み>てあれこそ.一色詮秀<いつしきあきひで>なるそ
うちもらすな.生捕<いけとり>と.下知<げち>をなせば十.騎<き>の.郎黨<らうとう>はせ.来<き>たり.四方<しほう>
よりつめよすれば.詮秀<あきひで>はのかれぬ.所<ところ>と.玄関<けんくわん>までにげしりそき.腹切<はらきり>
てうせけるにぞ.小栗<をくり>はやがてはせよりつ.一色<いつしき>が.首<くび>うちをとし.父<ちち>をは
じ
め.一族<いちそく>の.仇<あだ>をむくひけるその.間<ひま>に三郎.安武<やすたけ>.縄<なは>つきの
まゝ.逃<にげ>いだすを
.池<いけ>の.莊司<しやうじ>はうしろより.兜<かぶと>を.目<め>がけきりつくれば二ツになつてうせに
けり.残<のこ>る.郎黨<らうどう>.主人<しゆじん>のうたれしをみるより小栗の.前<まへ>にかふとをぬ
ぎみな／＼.降参<かうさん>なしたりける.横山大膳<よこやまたいぜん>もうちとらるべかりしを
.悪人<あくにん>ながらも.貞操<ていさう>の.照手<てうて>か.養親<やしなひをや>なれはとて.法師<ほ
うし>として.命<いのち>ばか
りは.助<たす>けけるその.後<のち>六十四才にて.病死<びやうし>なしけるとなりかくて小栗
助重はかち時を三.度<ど>あけたるその.声<こゑ>山谷にひゞき山もくつるゝは
かりなり小栗は父の.遺<い>命のごとく.一色詮<いつしきあき>秀をうちほろぼし.執権<しゆつけん>

[49 右]

小.栗<ぐり>助.重<しげ>
.郎等十騎<らうとうしつき>を
.従<した>がひて
.横山<よこやま>を
.責<せ>む

[49 左]

.一色詮秀<いつしきあきひで>.自害<じがい>す
.横山父子<よこやまふし>を.生捕<いけどる>

[50 上段]

.上杉安房守憲實<うへすきあわのかみのりさね>につゐて
.管領持氏朝臣<くわんれいもちうちあそん>へ.小栗一家<をくりいつけ>.罪<つみ>なくし
て.讒者<ざんしや>の.為<ため>に.滅亡<めつぼう>のよしをなげき
なにとぞめしかへさるゝやうにと
.言上<こんじやう>なしければ
.持氏公<もちうしかう>も.小<を>
.栗<ぐり>が.罪<つみ>

なきよし

をきゝ

給ひ

.御後〈こかう〉

.悔〈くはひ〉の

をりなれば

さつそく

.御許容〈ごきよやう〉あつて

.本領安堵〈ほんりやうあんど〉おゝせ

つけられ.再〈ふたゝ〉び.常陸〈ひたち〉の.小栗〈をくり〉に

たちかへりしかば日あらず

.美濃〈みの〉の.國府〈こくぶ〉につかひをつかわし

[50下段]

よろずや.長〈ちやう〉右衛門がもとに

あづけ.置〈おき〉たる.照手〈てるて〉ひめを

よびくだし.妻〈つま〉となして.君〈くん〉

.臣民家〈しんみんか〉にたるまで.万歳〈まんさい〉を

となへける.國府〈こくぶ〉な

る.長〈ちやう〉右衛門

には

.追〈おい〉てあ

またの.引出〈ひきで〉もの

ものをおくりつゝ.永代扶持〈ゑいたいふち〉

をぞたまわりける

○ かくて.小栗助重〈をくりすけしけ〉は

.判官平兼氏〈はんくわんたいらかねうち〉と

[50 梓内]

.小栗判官助重〈をくりのはんかんすけしげ〉

.更〈あらため〉て.平兼氏〈たいらのかねうち〉と.称〈よぶ〉

.名武篤光〈なたけあつみつ〉が

.息女〈そくぢよ〉

.照天姫〈てるてひめ〉

.横山〈よこやま〉の.養女〈やうぢよ〉となり

.再〈ふたたび〉.兼氏〈かねうじ〉に.嫁〈か〉す

[51 判読不能]